

目次

爬虫類

・基本事項	106
1．飼い主の責任	106
2．動物販売業者の責任	106
・共通事項	108
1．飼養動物の種類や品種を選ぶための情報	108
2．終生飼養を確保するために必要な情報	110
3．適正飼養を確保するために必要な情報	110
4．繁殖に関する情報	112
5．人と動物の共通感染症の予防に必要な情報	113
6．逸走・危害・迷惑の発生防止	114
7．生物多様性の保全	115
8．関係法令	116
・種類ごとの個別事項	119
ワニ	119
1．ワニ	119
カメ	121
2．ミシシippアカミミガメ（ミドリガメ）	121
3．ワニガメ	124
4．スッポン類	127
5．スッポンモドキ	129
6．ホルスフィールドリクガメ	129
7．ケヅメリクガメ	131
8．インドホシガメ	133
9．アカアシガメ	134
ヘビ	136
10．ナミヘビ類	136
11．ボア・ニシキヘビ類	139
トカゲ	142
12．ヒョウモントカゲモドキ	142
13．グリーンイグアナ	143
14．フトアゴヒゲトカゲ	146
15．カメレオン	147
16．アオジタトカゲ	148
17．オオトカゲ	149
・参考	152
引用及び参考資料等	152

1. 基本事項

平成11年12月に改正された「動物の愛護及び管理に関する法律」では、動物の所有者又は占有者の責務等として「命あるものである動物の所有者又は占有者としての責任を十分に自覚して」が加えられましたが、これは、動物の命を預かる飼い主の責任とその自覚を明記し、その徹底を図っていかうというものです。

飼い主がその責任を果たすためには、動物の生態、習性及び生理などの知識やその動物に適した飼育方法などを正しく理解することが不可欠です。これらの知識や技術を飼い主が身に付けるためには、動物の大きな供給源である販売業者が動物の販売に当たって、動物の習性や特性、適正な飼育方法などについて適切な説明を行うことが求められます。これらの説明が不十分で購入者の理解がないまま飼育されることが、その後の不適正な飼育管理や飼育放棄の一因となっている現状があります。特に、近年ペットとして飼育されるようになった爬虫類などの動物種の増加に伴い、この問題が注目されています。これらを踏まえ、「動物愛護管理法」では、動物販売業者に対し、購入者に適正な飼育方法等について説明し、理解させる責任を新たに課しています。なお、平成17年6月の法改正により、この動物販売業者の説明責任は、販売に際して文書交付による説明をすること等と、さらに強化されました。

動物を購入するときの窓口である動物販売業者による適正な説明が動物飼育をめぐる多くの問題を未然に防ぐための重要なポイントとなります。

1. 飼い主の責任

動物を飼うにあたっては、その動物の生態、習性及び生理をはじめ、成長に伴う変化等に適した飼育管理方法を事前に十分調べ、必要な準備をしなければなりません。これらの準備をしないまま、「かわいい」「珍しい」などの感情や一時的なブームに影響されて、安易に飼い始めてしまうことが、不適切な飼育管理や飼育放棄、遺棄につながります。

動物は飼い主を選ぶ立場にはありません。その生涯をすべて飼い主に託すこととなります。だからこそ、飼い主はその動物のすべてに責任を負うこととなります。

(1) 動物への責任

動物を飼うということは、その動物の命を飼い主が預かることです。「命ある動物を飼う」という責任を十分に理解したうえで、その動物に見合った適正な飼養管理に努め、その動物の命をまっとうするまでの間、愛情を注ぎ終生飼育し続けるという責任があります。そのために、飼い主は、住宅環境、家族構成の変化など将来的な生活設計を踏まえて、慎重に判断することが求められます。これらのことから、動物を飼うにあたっては、家族の同意が前提になることはいうまでもありません。

(2) 社会への責任

動物の飼い主には、飼っている動物が人の生命、身体、財産へ害を及ぼすことを防ぐとともに、逸走（脱走）等による自然環境への影響を防止する責任があります。爬虫類を誤って逸走させた場合には、爬虫類ということだけで周辺の住民を不安に陥れるなど大きな社会問題となる可能性があります。このため、飼い主には、日頃の飼育管理施設の点検、修理、補修を含め、必要に応じて繁殖制限等適切な管理等を行うことなど、動物が人間社会で共に暮らす上での特段の配慮が求められます。

また、災害発生時の動物による事故の防止や、避難の際の対応についても考えておくことが大切です。

2. 動物販売業者の責任

動物販売業者に購入者への説明責任を課したのは、飼い主の責務が適確に実施されるよう、これ

を最も効果的にサポートをしてもらおうということからです。

販売業者には、従業員が購入者に対し適切な説明、助言が行えるよう、日頃から従業員に対する教育、指導を行うことも求められています。

購入者への説明が必要な項目は、多岐にわたりますが、主な項目としては次のようなものがあります。

(1) 終生飼養

飼い主としての責任を果たす上で、最も重要な基本は「その動物の命を託され、終生飼い続ける」ことにあります。飼育途中で動物を手放すことのないよう、結婚などによる家族構成の変化や転勤や転居の有無など、将来的な見通しを踏まえて飼う必要があることを説明する必要があります。

(2) 適正飼養

それぞれの動物種には、それぞれの健康維持にふさわしい食物があり、本来の生態に適した環境と習性が十分に発揮できる生活空間が必要となります。外温動物の爬虫類にとっては、特に、適正な温度、湿度管理が重要です。また、その個体の成長後の姿を想像した飼育環境も整えておくことも必要です。そのために必要な情報を説明し、理解してもらうことが大切です。

(3) 動物に起因する感染症

動物から人へ、人から動物へ病原体が感染すること、又はその感染によって起こる疾病を「人と動物の共通感染症」などといい、世界で約200種類程度あるといわれています。爬虫類に関しては、未知のことが多くありますが、これらの感染症の多くは手洗いの励行など、日頃の注意で防ぐことができるので、必要以上に心配することはありません。予防法としては、日頃から動物の健康状態に留意し、ペットの爬虫類のほとんどが野生動物であるということを強く認識し、新しい動物を導入するときは十分な検疫を設けることが第一です。また、飼い主は飼育動物との過度の接触を避けるようにしましょう。人と動物の共通感染症に関するパンフレットを用意し、説明をするなどの工夫も必要です。

(4) 飼うための届出許可等

飼う動物の種類によっては、危険な動物として都道府県知事等の許可が必要な場合があります。爬虫類では、カミツキガメ類、大型ヘビ類、ワニ類、有毒の種類が該当します。許可を得る場合には、守るべき事項や行政による立ち入り検査等の規制を受けることとなります。それらの心構えがあるかの確認と、具体的な手続きを含め、以後に問題がおきないよう十分な説明が必要です。

(5) 購入後の飼育相談

動物が購入された後、販売業者が飼育に関する相談にも適切なアドバイスを提供することが求められています。

II. 共通事項

爬虫類の飼育開始にあたっては、最初に、現生の爬虫類は約6,500種という膨大な種数を数える動物群であり、その中の相当数の種がペットとして流通している現状と、それぞれの種が異なる飼育条件を求め、ということ認識する必要があります。また、流通している爬虫類全ての種において飼育技術が確立されていない（確立されている種のほうがはるかに少ない）という実情を踏まえて飼育管理を考えなければなりません。

1. 飼養動物の種類や品種を選ぶための情報

近年、爬虫類をペットとして飼育することがかなり普及してきました。流通する種数も増え、専門店のみならず総合ペットショップや観賞魚店でも扱う店舗が増えており、「鳴かない」、「臭わない」、「手間がかからない」といった表現で、一人暮らしや集合住宅でも飼育がしやすい動物であるという切り口で販売されている例も見られます。容姿の珍奇さから衝動買いされることも少なくないこと、また、一般的に爬虫類と認識されていないことも多い「ミドリガメ」の商品名で呼ばれるミシシippアカミミガメ (*Trachemys scripta elegans*) の幼体や、「ゼニガメ」（この呼び名は本来、ニホンイシガメ (*Mauremys japonica*) の幼体に対して名付けられたものでしたが、本種の生息数の減少と共に流通する数も激減し、近年ではクサガメ (*Chinemys reevesii*) の幼体に対しても使われるようになっていきます）の飼育人口は安価であることなどの理由から、大変多いと考えられます。

いずれにせよ、「手軽に飼育できる動物である」との誤解のもとに飼育が開始されており、必然的に正しい知識に基づいた適正な飼育がなされていない事例を目にすることも少なくありません。しかし、実際の爬虫類飼育は、爬虫類特有の性質や飼育している種ごとの情報を理解し、しっかりした飼育環境を設定した上で管理することが要求されます。

(1) 動物の特性

爬虫類に限ったことではありませんが、動物を飼育しようとするときには、その対象となる動物（種）の特性を十分に把握する必要があります。そのためには、好適な温度帯（至適温度帯）、好適な湿度、食性、行動特性（昼行性、夜行性など）、生息環境（地上棲、樹上棲など）、性質、成体のサイズ、寿命などの情報が必要であり、こうした情報を出来る限り提供すべきです。

特に、自ら体温を作り出すことが出来ない「外温動物」である爬虫類の場合は、温度管理の重要性が高いことを認識しておくべきです。

比較的多く耳にする質問に、「（人に）馴れますか？」というものがあります。ここで注意が必要なのは、この質問の真意は「（飼育者に）なつきますか？」というものであることです。

「馴れる」ということと「なつく」ということが全く違うものであることはいうまでもないでしょう。そして、ごく一部の種を除いて爬虫類には「なつく」ということはありません。飼育者の扱い（ハンドリングや給餌など）に馴れる事はあっても、犬や猫のような飼育者に対するなつき方はないと考えてよいでしょう。

また、爬虫類には人間に対しての危険性が高いとして、各地方自治体の条例により飼育を規制されている種が含まれています。このような種を飼育しようとする場合には、申請、規制条件を満たしたうえで許可がおりる、という流れがあることを理解しておかなければなりません。さらに、飼育を規制されている種以外にも非常に攻撃的であるなど、人間に危害を加える可能性のある種が存在し、十分な注意のもとで飼育管理する必要があることも、大切な情報です。

さらに、飼育が極めて困難であったり、事実上飼育が不可能な種が流通していることも事実です。一般的なペットとして飼育される爬虫類は、ヒョウモントカゲモドキ、キングヘビなど人工的に養殖が行われ、飼育下の環境に適応している種が選択されるべきでしょう。

外温動物とは

以前は爬虫類のように周囲の環境の温度によって体温が変動する動物のことを、「冷血動物」、「変温動物」といった呼び方をしていましたが、最近では「外温動物」という呼び方に変わってきています。

爬虫類は、一般に考えられているように単に周囲の温度で体温が決定されるのではなく、朝のうちや、エサを食べたあとなどは日光浴をして体温を上げたり、逆に暑いときには涼しい場所に避難して、積極的に体温を調整しています。飼育下でもこのような行動がとれるように、飼育ケージ内に場所による温度差を設けるようにします（これを温度勾配と呼びます）。

(2) 飼養目的

爬虫類にある程度の知識があり、選択した種が本当に好きで飼育しようとする場合、容姿から、また、販売価格から衝動的に購入しようとする場合、今後入手が困難になると予想されたり、価格が上昇することが予測されるからという投機的な理由など、飼育を開始する動機には様々なものがあり、場合によっては飼育ではなく入手（購入）が目的である場合もあります。安易な飼育の開始は、安易な飼育の放棄、不適切な環境における飼育につながるケースが多いことに留意したいものです。

(3) 自宅及び周辺的环境

実際に流通している爬虫類の中には、非常にコンパクトかつ簡素な施設で飼育できる種から、動物園クラスの設備を要求するものまで、様々な種が存在します。飼育者の住環境により、飼育可能な種がある程度決定されるという点は重要です。物理的な面では、四畳半一間のアパートで、最大甲長が80cmに達するうえに非常に成長速度の速いケヅメリクガメ (*Geochelone sulcata*) の飼育が可能であるわけがないのですが、これに近い事例は多く聞こえてきます。

また、特に集合住宅においては、たとえ小型で人間に対して全く無害な種であっても、ヘビの飼育には周囲から強烈な拒絶反応が出がちなものです。最終的には飼育者の判断にゆだねられる部分ですが、こうした点に関しては十分な確認が必要です。

(4) 野生由来ペット動物飼養の特殊性

犬や猫、ハムスター、フェレットなどの流通する個体が全て養殖された個体である動物と違って、爬虫類は野生採集個体が流通することが大変多いものです。また、人間の手によって養殖が行われている種や個体においても、それほど世代を経ておらず、飼育下の環境にそれほど適応していない場合もあります。このような動物を飼育する際には、その野生下における生態や生息環境を把握したうえで、できる限りこれを再現できるように飼育管理を行わないと、飼育の失敗につながります。

また、野生由来の個体に対しては、人と動物の共通感染症に対する警戒も必要となります。動物に触れた後は必ず手を洗う、といった極めて基本的な対応でこれに対するリスクは激減します。

ペットとして流通する爬虫類の中には、絶滅が懸念され、国際取引の規制を受けていたり原産国では保護を受けている種も存在します。飼育する種によっては「飼育個体に対する福祉」だけでなく「種に対する福祉」を考慮することも重要であり、責任を持って飼育することが求められます。

(5) 必要経費

飼育ケージやこれに付随する調度品、照明器具、保温器具などの飼育開始当初に必要な費用は、時として飼育しようとする動物の価格の数倍から数十倍に及ぶこともあります。特に動物の価格が低いときには、こうしたことに抵抗を感じる飼育者が多く、極力廉価で簡便な施設で飼育しようとする傾向があります。しかし、それぞれの種が要求する飼育環境はその価格とは全く関係がないもので、できる限りその要求を満たすものを用意しないと適切な飼育管理は不可能です。また、初期投資以降の飼育にかかる経費は、主に食餌の費用と水道、光熱費であり、

一般的に莫大なものにはなりません、大型になる種においては将来的に相当のものとなる可能性があることは当然です。

どのような場合にせよ、経済的観点から飼育される動物が不適切な扱いを受けるようなことは避けなければなりません。

2．終生飼養を確保するために必要な情報

爬虫類は哺乳類や鳥類などに比べて、終生飼養の例が非常に少ない動物です。いくつかの理由が考えられますが、大きな要因の一つとして、寿命の長さがあげられます。

最もペットに向けたトカゲの一つとされるヒョウモントカゲモドキ (*Eublepharis macularius*) には28年以上生きた記録がありますし、グリーンイグアナ (*Iguana iguana*) にも30年近い飼育記録があります。ヘビでは、カリフォルニアキングヘビ (*Lampropeltis getula californiae*) を例にとると、33年4ヵ月という記録があります。いずれも流通量が多く飼育される機会の多い種ですが、犬や猫をはるかに上回る寿命を持っていることはあまり認識されていないようです。カメは古くから長寿の代名詞として親しまれており、「長生きする動物である」という認識は持たれているはずですが、ミシシippアカミミガメ ミドリガメ (*Trachemys scripta elegans*) が40年ほど生きるということはなかなか実感しにくいようですし、さらに一部の種が100年を超える寿命を持つことを現実的に考えることは難しいものです。

これほどの長い期間には飼育者の生活環境には様々な変化が起こりうるため、その全てに対して事前に考慮することは不可能です。このこと一つとっても、爬虫類は「手軽に飼育できる動物」ではないこと、それなりの覚悟とでもいべきものを持って飼育に臨むべきことを十分に認識することの必要性が理解できるかと思えます。

もう一つの要因として、幼体で販売されることの多い動物の成長時のサイズに対する認識の不足があります。一般的な感覚では甲長が20cm以上のカメは「大きい」という感覚を持たれることが多く、事実、この程度のサイズのカメを持て余してしまう飼育者が多くなります。爬虫類として最も一般的で飼育人口が多いであろうミシシippアカミミガメは、「ミドリガメ」として販売されているサイズが成体であり、これ以上成長しないと思っている人も少なくありません。3年ほどで甲長は20cmに達し、雌であれば最終的に甲長30cmに達することもあるという事実を認識せずに飼育を開始すれば、適切な飼育空間を与えられないでしょうし、最終的には飼育個体の遺棄といった飼育放棄という結末を迎えるであろうことは想像に難くありません。「どこまで大きく育つかを理解しているか?」という点は必ず確認すべきであり、また、その際には正確な情報を伝えることが必要です。

また、飼育しようとする種の成長スピードをよく認識しておくことも大切で、特に大型になる種の場合には重要なポイントです。

先にあげたグリーンイグアナは、全長30cmに満たない幼体が販売されますが、適正な飼育環境のもとでは1年で全長が1mに達することもまれではありません。人気の高いリクガメにおいても、ケヅメリクガメ (*Geochelone sulcata*) は、最も販売されることの多い甲長6cmほどの幼体が、順調に成長すると1ヵ月に1cmほども甲長が伸び、3年後には甲長40cm、体重は25kgを超えることもあります。飼育者の感覚がこのような成長スピードについていくことができないと、飼育の放棄や飼育動物の遺棄につながるため、十分な説明が求められるところです。

さらに、爬虫類は必ずしも適切でない飼育環境下においても、相当の期間生存する場合がしばしばあります。言い換えると、3年、5年といった長い期間をかけて徐々に死んでいくという事態が発生するので、飼育個体の状態を把握するために日頃の観察が非常に重要なものとなります。

3．適正飼養を確保するために必要な情報

先に述べたとおり、爬虫類には多くの種が含まれており、それぞれの種によって要求する飼育環境や管理が異なります。正確な情報のもとに、飼育環境の設定、管理が行われ、適正な飼育が行わ

れるようにしなければなりません。以下に、一般的に留意すべき点について大まかに述べることでありますが、常に動物の状態を観察して、最初の環境設定や管理方法を修正することが大切です。

(1) 飼育ケージ

一般的に求められる条件は、飼育個体に対して十分な広さを持つこと、脱走できないこと、温度や湿度の管理がしやすいこと、給餌や清掃といったメンテナンスがしやすいこと、観察がしやすいことなどです。

樹上棲の種には底面積よりも高さを重視すべきですし、リクガメ類のように行動範囲が二次元的な種には底面積が重要になります。水を張って飼育する必要のある水棲カメ類には観賞魚用の水槽が用いられることが多いと思いますが、陸上部分を設ける必要があることと、水深を深くとることによってカメの行動空間を広くできること、水量の増加による水質悪化の鈍化などのメリットから、なるべく深い水槽を選択すべきです。

小型種であっても、広いスペースを与えないと精神的に安定しない種や個体が存在します。個体が小さいからといって短絡的に小さなケージで飼育することは避けるべきでしょう。

また、一部の種を除いては個体間の干渉が激しいことが多く、一個体一ケージが基本となります。

(2) 飼育ケージ内の調度

樹上棲種には止まり木を、隠れる性質がある種にはシェルターを、といった種ごとの要求に合わせたものを用意します。自然を模して、美しくレイアウトすることは飼育の大きな楽しみの一つとなりますが、メンテナンス性には注意を払いましょう。

床材の選択には頭を悩ませることが多いのですが、歩きやすいこと、ほこりが出にくいこと、汚れが目立ち清掃や交換がしやすいことなどを基準に選びます。また、多湿を好む種には保湿性が高いもの、乾燥した環境に生息する種には、濡れてもすぐに乾くものを選択します。

(3) 温度管理

爬虫類は外温動物ですから、それぞれの種の要求に沿った温度管理を行う必要があります。温度により代謝機能変動し、成長、内分泌、消化などに大きな影響を与えます。必ずしも熱帯産の種が高い温度を好むという訳ではなく、飼育種ごとの至適温度帯を把握して飼育環境の温度を設定します。わが国の夏の気温は、種によっては致命的な場合があり、低温を好む種の飼育にあたっては、エアコンによる温度管理が必要な場合もあります。

重要なのは飼育ケージ内に温度勾配を設けて、飼育個体はその時点で最も快適な温度の場所に移動できるようにすることです。ホットスポットと呼ばれる高温の場所をケージの一方に設置し、もう一方は低温になるように、このためにも飼育ケージにはゆとりのあるサイズが要求されます。

冬季の暖房に対しては、様々な保温器具が販売されていますが、大切なことは保温電球のような空気を暖めて飼育環境そのものの温度を上昇させるタイプの器具と、パネルヒーターのように動物自体を暖める器具を必ず併用することです。温帯に分布する種に対して冬眠を試みたり、無加温で越冬させようとする飼育者が見られますが、前者については相当の飼育スキルが必要なこと、後者については動物の生命を危険にさらす可能性が高いことから、基本的には避けるべきです。

温度は目に見えません、最高最低温度計の設置は爬虫類の飼育にあたって必須の装備です。

(4) 湿度管理

熱帯雨林に生息し高い湿度を好むものから、砂漠に住み乾燥した環境に適応しているものまでさまざまな種があります。いずれも通気性を十分に確保することが大切で、たとえ高湿度を要求する種であっても蒸れるような環境では体調を崩します。

また、冬季の極端に湿度が低下する季節には、暖房することによる乾燥とあいまって砂漠棲の種であってもしばしば脱水を起こすため、霧を吹くなどして最低限の湿度の確保に努めます。

(5) 照明

例外はあるものの、多くのヤモリのような夜行性の種や、多くのヘビ類は照明を必要としませんが、多くのカメ類のような昼行性の種には必ず照明を設置し、昼間の時間帯に点灯するようにします。

爬虫類の飼育においては、古くから特にカルシウム代謝に大きな影響を持つ紫外線の照射に関心が高く、現在ではこの点を重視した照明器具が多く開発、販売されているので、こうした製品を利用します。ただし、紫外線は強ければよいといった性格のものではなく、種ごとの紫外線要求量に見合ったものを選択します。

直射日光による日光浴は、大いに奨励されますが、通気性の確保及び動物が避難できる日陰の部分を用意することと、日光浴時の気温に十分な配慮をしないと熱死させてしまうことがあります。

また、昼行性の種であってもむやみに明るい環境は好まない種も存在します。このような種に対してはシェルターを設けたり、飼育ケージに対して小型の照明器具を使用するといった配慮が必要となります。

(6) 食餌と水

人工飼料が非常に発達しており、これだけで終生飼育が可能な水棲ガメ類以外の種においては、飼育している種に合ったエサを与えなければなりません。

肉食の種には、エサ用に販売されている昆虫類やマウス、魚、貝類、脂肪分の少ない肉などをそれぞれの種の食性に合わせて与えます。特にコオロギやミルワームといった昆虫類はカルシウム・リン酸比が悪いので必ずカルシウムの粉末をまぶして与えるようにします。これに加えてビタミン、ミネラルなどの粉末も定期的に加えます。マウスは完全栄養であると考えられることが多いのですが、冷凍されたものはビタミンが破壊されていることを考慮し、やはり定期的なビタミンの添加が推奨されます。

草食種には、市販の野菜、果実、野草などを与えます。ここでもカルシウムとビタミンの添加は必須となります。

雑食で、何でも食べるから飼育しやすいという表現をされる種がありますが、これは逆に様々なものをバランスよく与える必要があるということで、必ずしも飼育しやすいわけではありません。入手しやすい食餌に偏ることのないように注意が必要です。

飲用の水は必ず用意します。トカゲ類には止水を水と認識しない種があり、霧を吹いたり、ドリップ式の容器を用意する必要もあるでしょう。乾燥した地域に生息するリクガメ類には、水を飲もうとしない個体が見受けられます。このような場合は、無理に飲ませようとするよりは、食餌にレタスやキュウリなどの水分量の多いものを混ぜて与えるとよいでしょう。ヘビ類には必ず全身を浸すことのできる水容器を設置します。

4 . 繁殖に関する情報

動物を飼育するうえで繁殖を試みることは大きな楽しみの一つですし、自らの飼育スキルの証ともなる部分です。さらに飼育技術が確立されているとはいいがたい爬虫類飼育の現状や、野生資源の浪費を避ける意味合いからも、飼育下における繁殖の試み、及びその技術の確立は推奨されるべきものです。事実この分野は、アマチュアの先導により発展してきた要素が大きく、現在もその傾向はそれほど大きく変化していません。

しかし、爬虫類の繁殖は決して簡単なものではありません。単純に雌雄を一緒に飼育していればよい、というようなものではないことは当然で、本来適正な飼育に必要な、飼育スペース、温度、湿度、光環境、栄養などの条件のバランスを高いレベルで取ったうえでさらに経験や勘に頼る部分があること、また、最終的には飼育している個体次第で結果が左右されてしまうことも多いものです。

具体的なリスクとしては、爬虫類の求愛行動には暴力的な行動を取る種があり、発情のタイミングが合わないまま雌雄を同居させた場合に、雄の求愛に答えようとしない雌が傷つけられたり、反

対に雌に逆襲された雄が怪我を負わされること（極端な場合どちらかが殺されることもあります）がありますが、同様の理由で普段から雌雄の同居飼育は避けるべきです。さらに雌の体力が十分ではない状態で、産卵にいたりその後体力を回復できないまま死亡してしまうこと、抱卵はしたものの、温度や産卵スペースが不適切なために産卵することができず、卵詰まりを起こしてしまうことなどがあります。

また、発情促進や受胎率の向上のために、冬眠も含めて季節的な低温にさらすという操作が必要な種も多いのですが、その際の温度管理や過度の乾燥による個体のへい死も大きなリスクとしてあげることができます。

繁殖を試みるにあたっては、まず何よりも飼育している個体を良好な状態に保つ、いわゆる「飼いいこんだ」状態を実現する必要性が非常に大きく、この飼い込む期間は年単位で考える必要があります。

さらに、繁殖を考える際には、「どのような種を繁殖させるか」という点にも考慮が必要です。成功した場合、種によっては1回の産卵によって数十頭のベビーが得られることもあります。殖やした個体を全て、手元に置いて飼育することが可能ならばよいのですが、そうではない場合には責任を持って飼育できる譲渡先を見つける必要があります。この譲渡先を見つけるということの難易度が、種によって大幅に違ってくることをよく理解したうえで種の選択を行わないと、不適切な飼育環境におかれる動物を増やす結果を招く上、飼育者の飼育意欲を削ぐことにもなりかねません。このような個体が動物販売業者に持ち込まれることもよくあります。繁殖者が換金したい気持ちは理解できますが、業界の実情からなかなか希望通りには行かないことが多いと思われます。商業的な人工養殖が盛んに行われている種ほど、飼育下での繁殖に適応しており一般家庭での繁殖が成功する可能性が高いといえますが、こうした種は流通量も多く適切な譲渡先の確保が難しいというのも事実です。

いずれにせよ、動物の安易な繁殖は慎むべきものであり、入念な準備と十分な計画性を持って望みたいものです。

5. 人と動物の共通感染症の予防に必要な情報

(1) 感染症の種類

世界で約200種類近くある「人と動物の共通感染症」の中で、爬虫類から人に感染する恐れのある代表的な病気はサルモネラ菌による感染症です。国内でもミドリガメから感染した事例があり、新聞などで報道され注意が呼びかけられたことがあります。アメリカでは、全家庭の約3%が何らかの爬虫類を飼育していると推定され、年間約70,000人がサルモネラ菌に感染しているといわれています。サルモネラ症は細菌性食中毒の代表といえますが、人に感染すると急性胃腸炎の症状が出て、時には敗血症を起こし生命にかかわる事態となることもあり、5歳未満の子供や高齢者、基礎疾患のある人（糖尿病などの免疫機能が低下する疾患）及び妊婦は特に注意を要します。爬虫類も人と同様に急性胃腸炎の症状が出ることもありますが、無症状でサルモネラ菌を排出する例もありますので注意が必要です。サルモネラ菌以外に、主として下痢の原因となる細菌を保有していることもあります。"

また、口腔内に連鎖球菌、ブドウ球菌などの細菌を保有することがありますが、咬まれた傷から細菌が感染し、化膿の原因となることがあります。イグアナに顔を咬まれて炎症を起こした事例が、海外で報告されています。

まれにパストレラや抗酸菌といった病原性の強い細菌を口腔内に保有していることも海外で報告されています。そのため、爬虫類に咬まれたとき（場合によっては引っかかれたときも）の注意も必要となります。爬虫類に咬まれて痛み、腫れ、発赤、化膿などの症状があるときには、医療機関にて受診することを勧めてください。

現在のところ、爬虫類飼育による人への感染症発生は、それほど多くはありませんが、今後増加する心配もあります。

(2) 予防のための注意点

次のような注意を行うことで、感染は十分に予防できます。

- ・動物及びそのケージ等施設に触れた後は、常に石けんと流水で十分に手を洗う。
- ・糞便は素手で触らない。
- ・特に、カメ類の水槽の清掃は頻繁に行い、漂白剤等を用いて消毒する。
- ・爬虫類は台所や食事をする場所に入れない。
- ・餌皿、飼育ケージ、水槽などの洗浄は台所等では行わない。浴槽などを使用した場合は十分に洗浄し、漂白剤で消毒する。
- ・乳幼児や高齢者との接触は避ける。
- ・咬まれたり、引かれたときは十分に洗浄、消毒を行う。
- ・化膿した傷がなかなか治らないときは、医師の診断を受ける。

犬や猫を飼うときも同じですが、爬虫類も病原菌をもっている可能性があることを認識した上で飼うことが重要です。そのため、動物販売業者には、爬虫類の飼い主や購入希望者に対し、これらの感染症に関する情報を提供することが求められます。

6. 逸走・危害・迷惑の発生防止

(1) 逸走防止

爬虫類は脱走の名人です。飼い主は、爬虫類は必ず逃げるという前提のもとに飼育管理を行う必要があります。爬虫類は一般的には好まれない動物です。逸走（脱走）した場合は、その容姿等から攻撃性や危害等がない場合でも、人々は恐怖感、嫌悪感等の反応を示すことがあり、迷惑や騒ぎとなることがあります。飼育施設は逸走できない構造とし、施設の点検など注意を払って管理するのはもちろんですが、たとえうっかりしていても逃げられることのない管理システムをあらかじめ確立しておくなど、慎重な上にも慎重な管理が求められます。また、逸走した場合は、飼い主が自らの責任で、速やかに捜索し捕獲してください。人に危害を与える可能性のある動物の場合は、110番通報等が必要です。

一方、飼育動物が逸走、遺棄などにより野生化する外来生物問題や、危害等が発生した場合、飼い主が判明することが困難であったり、保護収容されても個体標識がないため飼い主の元へ戻れなくなる事例が後を絶ちません。「動物愛護管理法」では、動物の飼い主に対し、飼い主責任の所在を明らかにするとともに、逸走した動物の飼い主発見の促進や遺棄防止の徹底を図るために、その動物が自分の飼育動物であることを明示するよう求められています。爬虫類の個体識別方法には、その個体の大きさにもよりますが、マイクロチップなどがあります。動物種に応じた個体識別措置を講じてください。

(2) 危害防止

動物による危害防止のため、「動物愛護管理法」は次のようなことを定めています。

「人の生命、身体又は財産に害を加えるおそれがある動物として政令で定める動物（以下危険動物という）の飼養又は保管を行おうとする者は、環境省令で定めるところにより、特定動物の種類ごとに特定動物の飼養又は保管のための施設の所在地を管轄する都道府県知事の許可を受けなければならない」と定め、危険動物の種類については政令により指定されています。

政令により指定されている危険動物

人の生命・身体・財産などの侵害の恐れがある動物として政令で定めている動物のうち、爬虫類については次のとおりです。

科名	種名
(1) かめ目	
かみつきがめ科	かみつきがめ科全種
(2) とかげ目	
どくとかげ科	どくとかげ科全種
おおとかげ科	ハナブトオオトカゲ、コモドオオトカゲ
ボア科	ボアコンストリクター、アナコンダ、アメジストニシキヘビ、インドニシキヘビ、アミメニシキヘビ、アフリカニシキヘビ
なみへび科	ブームスラング属全種、アフリカツルヘビ属全種、ヤマカガシ属全種、タチメニス属全種
コブラ科	コブラ科全種
くさりへび科	くさりへび科全種
(3) わに目	
アリゲーター科	アリゲーター科全種
クロコダイル科	クロコダイル科全種
ガビアル科	ガビアル科全種

家庭動物等の飼養及び保管に関する基準による飼養上の留意事項

家庭動物等の飼養及び保管に関する基準の第3に、特に、家畜化されていない野生動物等を飼養する場合について、飼養及び保管にあたっての配慮すべき事項が規定されています。

- 1) その生態、習性及び生理に即した特別の飼養・保管のための諸条件を整備し、維持する必要があること、譲渡が難しく飼養の中止が容易ではないこと、人に危害を加える恐れのある種類が含まれていること等を、その飼養に先立ち慎重に検討すべきである。
- 2) こうした動物は、ひとたび逸走等により自然生態系に移入された場合には、生物多様性の保全上の問題が生じる恐れが大きいことから、飼養者の責任は重大であり、この点を十分に自覚する必要がある。

動物の愛護及び管理に関する条例

(通称ペット条例：自治体により名称、内容は多少異なります。)

多くの地方自治体は、人の生命、身体又は財産への侵害の恐れがある動物として政令で定めた動物を飼養する場合は許可を必要とすることと、守るべき事項や行政による立ち入り検査等の規制措置を内容とする条例を定めています。詳細については各自治体にお問い合わせください。

7. 生物多様性の保全

健全で安定した生態系を維持していくためには、地球上に様々な多くの動物種が存在し、多様な生息環境が存在することが必要です。

しかし近年、様々な原因により、地球上の生態系が破壊あるいは影響を受けつつあることが報告されていますが、このところ注目されていることに、飼育されていたペットの遺棄・逸走による生態系影響の問題があります。海外からわが国に移入された動物は、本来わが国に生息する生物とその性質を異にするものであることから、移入動物が国内の自然界に定着した場合、在来種の捕食や駆逐、在来種との交雑などを招き、生態系へ影響を及ぼしているのです。

マングースやノネコの影響で絶滅の危機に直面している沖縄のヤンバルクイナの例をはじめとして、ブラックバス、カミツキガメ、ミシシippアカミミガメの国内定着による在来種の駆逐などが

生態系の影響、攪乱要因となっていることはよく知られているところです。

これらの問題に対処するため、国は平成16年6月「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」を制定し、今後、政令で定める外来の動物種についてはその輸入・飼育を厳しく規制することになりました。

また、「動物愛護管理法」は飼い主の責任として動物愛護と危害、迷惑防止のため、逸走防止と遺棄の禁止を定め、適正な管理を求めています。

人と動物が共生できる社会を実現していくためには、近隣への迷惑防止の面からだけでなく、動物の遺棄・逸走などの不適正な飼育、特に外国からの輸入の多い爬虫類の飼育に際しては、生態系に影響を及ぼすおそれがあるということを認識して、慎重な飼育が望まれます。

8 . 関係法令

爬虫類の販売や飼育にあたっては、「動物の愛護及び管理に関する法律」をはじめとした国内法のほか、各国の法律や国際法により制限されているものが多くあります。

以下、その主なものについて示します。

(1) 国内法

動物の愛護及び管理に関する法律（昭和48年10月1日 法律第105号）

この法律は、動物の愛護に関する事項と動物の管理に関する事項を定めて、国民の間に生命尊重などの情操を養うことに役立たせるとともに、動物による人の生命、身体、財産等に対する侵害を防止することを目的としており、この中で飼い主として果たさなければならない責任と努めなければならない義務等を定めています。

【基準】

飼い主が法律で定められた責任を果たすために守らなければならない事項を示しています。動物愛護管理法に基づき次のような4つの基準が定められています。

- ・家庭動物等の飼養及び保管に関する基準（平成14年5月28日 環境省告示第37号）
- ・展示動物の飼養及び保管に関する基準（平成16年4月30日 環境省告示第33号）
- ・実験動物の飼養及び保管等に関する基準（昭和55年3月27日 総理府告示第6号）
- ・産業動物の飼養及び保管に関する基準（昭和62年10月9日 総理府告示第22号）

このほか、動物取扱業を対象として次の基準があり、これに違反した場合は改善命令、措置命令、罰則が定められています。

- ・動物取扱業者が遵守すべき動物の管理の方法等の細目

（平成18年1月20日 環境省告示第20号）

動物愛護管理関係条例

動物愛護管理法に基づいて都道府県等で制定している、動物の飼養に関する条例があります。各都道府県等によって内容に違いがありますが、危険な動物の飼養の許可制、犬・猫の引取り、犬の逸走防止などが規定されています。

また、区市町村で条例を制定しているところもあります。内容についてはそれぞれの自治体の担当部署に問い合わせて下さい。

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律

（平成16年6月2日 法律第78号）

この法律は、外国や国内の他の地域から持ち込まれた外来生物による生態系への影響（在来種の捕食、競合、駆逐や交雑による遺伝的攪乱等）、人の健康や農林水産業者への被害を防止するため、政令で定める外来生物（特定外来生物）の輸入の原則禁止、飼養の禁止や許可制、個体識別措置義務、野外へ放つことの禁止、防除などについて定めています。

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止 に関する法律の概要

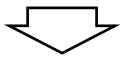
目的

特定外来生物の飼養、輸入等について必要な規制を行うとともに、野外等に存する特定外来生物の防除を行うこと等により、特定外来生物による生態系、人の生命若しくは身体又は農林水産業に係る被害を防止する。

特定外来生物被害防止基本方針の策定及び公表

特定外来生物

生態系等に係る被害を及ぼし、又は及ぼすおそれのある外来生物を政令で指定



特定外来生物の飼養・ 輸入等の規制

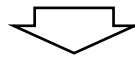
飼養、栽培、保管又は運搬は、主務大臣の許可を受けた場合(学術研究等の目的で適正に管理する施設等を有する)等を除き、禁止
輸入は、許可を受けた場合を除き、禁止
個体識別措置等を講じる義務
野外へ放つこと等の禁止

防除

野外における特定外来生物について国のほか地方公共団体等の参加により防除を促進する。

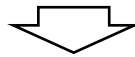
未判定外来生物

生態系等に係る被害を及ぼすおそれがあるかどうか未判定の外来生物を主務省令で指定



未判定外来生物の 輸入の制限

輸入者に届出義務
判定が終わるまでの一定期間輸入を制限

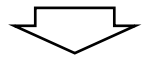


主務大臣の 判定

被害を及ぼす
おそれあり

被害を及ぼす
おそれなし

指定されない
生物



規制なし

その他、輸入時に特定外来生物を確認する証明書の添付、調査、普及啓発、罰則等所要の規定を整備する。

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）

（平成4年6月5日 法律第75号）

野生動植物が生態系及び自然環境の重要な一部として人類の豊かな生活に欠かすことのできないものであることから、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存を図ることを目的としています。

捕獲及び譲渡の禁止、国際希少野生動植物種の個体登録、生息地などの保護に関する規制などを規定しています。

国際希少野生動植物は、商用目的で繁殖された個体でも、登録したものでなければ販売、譲渡、陳列はできません。譲渡、売買にあたっては、登録票があることを必ず確認して下さい。また、販売、頒布目的で陳列するときは、登録票を備え付けなければいけません。

（2）条約

絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約

（CITES = Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora）

（ワシントン条約 昭和55年条約第2号）

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」（以下「サイテス」という。）は、絶滅の危機にある野生動植物を保護するために制定された国際条約で、1973年に採択、75年に発効し、わが国では1980年に国会承認され批准されています。条約の規制対象となる野生動物種は、3段階の附属書として絶滅の危機の度合いに応じて次のように分類されています。

附属書I

これに含まれている種は、最も絶滅のおそれがあるとされているもので、学術研究用として輸出許可証と輸入許可証が付けられたものと、人工飼育により繁殖させた個体（第2世代の個体）以外の商業取引は原則禁止されています。

附属書II

これに含まれている種は、現在必ずしも絶滅のおそれがあるというわけではありませんが、その国際取引を制限しておかないと将来絶滅のおそれのある種になる可能性があると考えられているものです。

これについては商業目的の国際取引は可能ですが、その輸出入に際しては輸出国の輸出許可書が必要とされています。

附属書III

これに含まれている種は、特定の締約国にとって自国内で規制する必要がある、かつ取引の取り締まりのため、他の締約国の協力が必要と認められることから指定された種です。

これについては商業目的の国内取引は可能ですが、その輸出入に際して、附属書掲載国からの輸出の場合は当該国の輸出許可証が、それ以外の原産国からの輸出の場合は原産地証明が必要となっています。

III . 種類ごとの個別事項

〇ワニ

1 . ワニ

(1) 分類、品種

ワニはワニ目に属する動物で、通常3科22種に分けられます。ワニの英語名は全体ではクロコディリアン、グループごとにアリゲーター、カイマン、クロコダイル、ガビアル(ガリアル)と呼びます。これは和名と単純に合致しているとは限りません。

アリゲーター科：アリゲーター2種 ミシシッピワニ (*Alligator mississippiensis*)、ヨウスコウワニ (*Alligator sinensis*)、カイマン5種 メガネカイマン (*Caiman crocodilus*) など。

クロコダイル科：クロコダイル14種 イリエワニ (*Crocodylus porosus*)、ナイルワニ (*Crocodylus niloticus*)、コビトワニ (*Osteolaemus tetraspis*) など。

ガビアル科：ガビアル1種 インドガビアル (*Gavialis gangeticus*) 。

カイマンとガビアルは、そのままカイマンとガビアルといいます。アリゲーターはワニとすることが多いのですが、アリゲーターとすることもあります。クロコダイルはだいたいワニと訳されます。

(2) 形態、生理、習性

ワニは22種に分けられますが、全体的な印象は似ていて、1つにして扱えます。ただ大きさは最大になっても1.5mに満たないものから、10mに達するものまであります。子供は20~30cmで生まれてかわいいものですが、成長が速く数年で1mを超えますから、危険になっていきます。餌が肉や魚ですから臭いは出ますし、水の濾過をしっかりとする必要があります。繁殖期や地震や雷の時などには大声で鳴く種類もありますが、そんなにやかましいものではありません。寿命はおおむねミシシッピーワニ56年、メガネカイマン22年、コビトワニ42年です。

(3) 飼育上必要な設備

ワニはアリゲーターの2種以外、熱帯・亜熱帯に分布しています。水中で生活し、陸にもよく上がります。水はワニがある程度泳げる位の広さが必要です。糞はだいたい水中でしますが、時々陸上でもします。濾過循環装置をつけ、陸上から水を流しこまないような排水も必要です。水温は25~28位に保ち、20以下にはしないでください。湿度は考える必要はないと思われませんが、採光は必要で、日光浴ができればよいのですが、できなければ陸上でひよこ電球や赤外線ランプで照射してください。気温は30位あったらよいでしょう。飼育

場所は限られていますから、温度が上がり過ぎないように注意が必要です。通風はあまり注意する必要はないかもしれませんが、ムレないように気を付けてください。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌はマウスやラットなどのネズミ、鳥、淡水魚（ドジョウ、小魚、鯉等）です。海水魚は餌の全体量の半分位なら大丈夫のような報告もありますが、半分以下に控えた方がよいと思われれます。その他、馬肉、レバー等があげられ週に1～2回与えます。子ワニにはカルシウムやビタミンを多く含む餌を与えてください。給水については、生活水を十分濾過する必要があります。運動はあまり気にしなくてよいと思われれますが、逸走（脱走）には十分留意して、水槽の場合は金網などでフタをして、重しをのせておく必要があります。手荒な扱いをすると、気性が荒い個体になります。咬まれないように気を付けながら、やさしくしてください。近寄ると、たいてい餌をくれるものと思って寄って来て、待つようになります。

(5) 健康と安全の管理

主な病気とその予防法としては、ワニに限らず爬虫類の健康管理はまず温度管理です。風邪や肺炎は温度管理が十分ならたいてい大丈夫です。

脂肪織炎は海水魚を与え続けると起こりやすくなります。

観察は動物を飼うときはいつでも必要で、食べ残し、糞、動きなどに注意して見てください。成長を考慮しながら、太りすぎなら餌のやりすぎに注意し、餌が残らないようなら、時々餌を増やして様子を見ます。餌はネズミ中心がよいと思われれますが、ヒヨコ、鯉、馬肉、レバーなどを組み合わせて与えます。餌は様々な種類を与えた方がよいでしょう。ケージ内は清潔に保ってください。ワニは水中で過ごすことが多いので、特に水は清潔に保ってください。不潔だと健康にも影響が出るでしょう。

(6) その他特記事項

ワニ目は全種がサイテスの附属書II以上で、一部が附属書Iに属します。

(2)形態、生理、習性で述べたように、かなり大きくなりますし、全種危険動物に指定されていますので、飼育には許可が必要ですし、施設・設備も大掛かりになります。ペットとして飼うには、死ぬまで飼うつもりがなければ、飼うべきではありません。飼い主がなくなっても、家族が責任を持つべきです。飼うのであれば、ワニが活着している限り一生飼うと覚悟を決めて飼ってください。

しかしながら、ワニ類は普通の家庭では飼うべきではなく、動物園や水族館のような施設に任せるべきだと思われれます。

○カメ

カメはカメ目に属する動物で、通常12科200種以上に分けられます。甲羅を持ち、原則として、甲羅に頭・四肢・尾を隠すことができます。

カメが住む場所は、例外はありますが、四肢の形態である程度判断できます。池や川などに住むヌマガメ類は、指の間の水かきの発達程度で分かりにくいかもしれませんが、指がはっきり分かれます。陸にすむリクガメ類は、四肢がこん棒状をしていて、爪ははっきり分かれますが、1本1本の指は分かりません。海にすむウミガメ類は、前肢がオール状をしています。

爬虫類では大きさを表すのに、通常、頭の前から尾の先までの全長で表しますが（これを体長ということもありますが、哺乳類では体長は尾を除いた長さなので、全長の方がいいでしょう）、カメは頭や尾を甲羅の間にかく特徴があり、測るのが難しいので、甲長（背甲 背中の甲羅の長さ）で示すのが普通です。

2. ミシシippアカミミガメ（ミドリガメ）

(1) 分類、品種

ミシシippアカミミガメ (*Trachemys scripta elegans*) はイシガメやクサガメと同じヌマガメ科のカメで、北アメリカに分布しています。このカメは小さい時に緑色をしていますから、ミドリガメといわれています。しかし緑色をした子ガメがミシシippアカミミガメだとは限りません。

緑色をした子ガメは、近縁のアメリカヌマガメ類の子ガメだけでもたくさんいるのです。ただ日本に輸入される大部分がミシシippアカミミガメの子ガメだということで、ミドリガメといえば、ミシシippアカミミガメということになっています。ちなみに英語でグリーンタートルというとアオウミガメのことです。以下の「アカミミガメ」は「ミシシippアカミミガメ」を指します。

(2) 形態、生理、習性

ミドリガメという商品名で販売されている時の甲長はわずか3 cm程度ですが、順調に成長すると4～5年後には雌で28cmに達します。寿命はおおむね20年ほどといわれています。

小さい頃は緑色をしています。成長するとオリーブ褐色の地に黒や黄褐色の斑紋のはいった地味な色彩になります。和名が表すように、耳の付近を横切る赤いライン模様がありません。また、改良品種として、アルビノやパステルといったものがありますが、アルビノ個体においては、目が悪い、あるいは目が弱くて眼病になりやすい虚弱な個体が散見されます。

また、本来必要な日光浴の量を調節する必要があるなど、アカミミガメとは思えない、飼育困難種ともいえる側面があります。

雌雄の鑑別は前足の爪と尻尾の形態をみて行います。爪がフォークのように長く、尻尾も太くて長く、総排泄腔が甲羅の辺縁より外に位置するのが雄です。また成長しきった個体で

は雄のほうが雌より小柄です。

温帯性のカメであり、日本の四季によく順応します。十分なスペースと良好な環境を用意すれば、通年屋外飼育が可能で、屋内飼育よりもむしろ健康でプロポーションのよいカメに育てることができます。発情した雄は、長い爪を使って独特の求愛行動をとります。

肉食に近い雑食性で、野生ではザリガニをはじめとする水棲小動物やその死骸、各種水草やその腐植などを口にしています。

泳ぐという行動に特化した形態をしています。甲羅は水の抵抗が少ないなめらかなカーブを描き、手足には広く発達した水かきがあり、かなりのスピードで泳ぎまわることができます。水から突き出した木の枝などにも巧みによじ登って日光浴をするなど、意外なほど立体的な活動を行います。陸上でも短距離ならば相当なスピードで走ることができます。

成長して20数cmに達したカメは、人馴れしている個体を除き、おおむね荒い性質を持っており、咬み付く力も強く、くちばしも鋭いので、咬まれるとけがをします。

大きな個体を屋内で水槽飼育をする場合、毎日水を換えても大量の糞尿によって相当な悪臭がします。汚水には大量の雑菌が繁殖しているため、大変不衛生です。

(3) 飼育上必要な設備と機材

アカミミガメは劣悪な環境でも生存し、間違った飼育方法でもなかなか死亡しないため、正しい飼育方法が省みられることは多くありません。

アカミミガメの本来の生態を考えると、屋外の池で飼育するのが理想的です。ベランダに大型水槽を設置した飼育がこれに続きます。しかし、たいていの場合、屋内の水槽飼育ということになりますが、大きく成長した個体では、最低でも90cm。通常は120cmの大型水槽を用意しないと、泳ぎ回ることができません。よく行われている浅く水をはったタライや60cm水槽での飼育は、愛玩動物としての飼育という概念から逸脱し、虐待ともいえる環境になります。

少量の水を頻繁に交換するタライ方式は、体型の異常や、カビなどの皮膚感染、大量の雑菌の繁殖といった問題があります。一方で飼育コストがかからないことや、日光浴をするため容器ごと移動がしやすいといったメリットがありますが、いずれにせよアカミミガメの正しい終生飼養の方法とはいえません。

以上のことからアカミミガメを正しく飼育するためには、アロワナなどの大型魚を飼育するつもりで飼育施設を用意する必要があります。ただし、アロワナなどよりもはるかに水を汚しますので、強力かつ大きな濾過システムをつくる必要があります。目詰まりのしにくい荒めの濾材（直径3～4cm大の溶岩濾材が最適）を底面濾過装置（穴の開いた塩ビ板に塩ビパイプで足を付けスノコにしたもの）にセットして、これに大きめの外部濾過装置を接続して水をまわし、月に1度程度、部分的に水換えを行います。底面濾過装置にヘドロが溜まり始めたら、水槽ごと大掃除をしますが、直径3～4cm大の溶岩濾材を利用すると、おおむね年に1度程度のメンテナンスで済みます。外部濾過装置の濾材も同梱のものと溶岩濾材を入れ替えて使用すると、メンテナンスを頻繁にしなくて済みます。直径3～4cm大の溶岩濾材

は、隙間が広いので目詰まりしにくく、好気的な濾過が行われます。また、ここに発生した様々な微生物によってカメの糞や食べ残しの餌が分解され、外部濾過装置のポンプを詰まらせません。さらに、微生物が構築する生態系によって、大腸菌やサルモネラ菌、カビなど有害な微生物が捕食され、皮膚病などの病気の発生が抑えられ、飼い主の衛生にも良好な水が作られます。

甲羅干しのための陸場を水面付近に作ります。従来からいわれているような底砂利で傾斜を作るのではなく、十分な水深をとった上で、浮島をセットします。子ガメから親ガメまであらゆる大きさのカメに対応した様々な製品が売られていますのでそれを利用します。

照明は、人工太陽灯を浮島に向けて照射し、上陸したカメが照明にあたるようにします。

室内飼育のカメにあてる照明は、以下の要因を満たしたうえで、太陽光の代用とせねばなりません。

すなわち、体温を上げるための熱(カメの体温調節を水槽の水温調節でまかなおうとするのは間違いです)、十分に明るいこと(照度)、物体本来の色がきちんと見えるような光の色(演色性)、カメの生理活性を高める波長を含むこと(カルシウム代謝や皮膚の新陳代謝に必要な紫外線など)、などの要素を過不足なく満たしていないと、カメの健康は維持できません。市販の器具でたとえると、ハロゲンライトで熱と明るさを確保し、これに爬虫類用の蛍光灯を組み合わせると紫外線を補助するというのが一般的です。また、少し高価ですが、HIDランプ(水銀灯やメタルハライドランプなどの高輝度放電管)は、1灯で全ての要素をカバーできます。

ちなみに、窓越しの日光は、紫外線が足りないといわれますが、トータルのエネルギー量が桁違いに大きいので、電気代を使って人工の光源を使用するよりもはるかに効果的で経済的です。まずは水槽の位置を日当たりのよい窓際に置くことを考えましょう。ただし、夏の暑さで水槽が異常高温になる危険もありますので注意が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は市販のヌマガメ用配合飼料か、鯉の餌が利用できます。カメの餌と称する商品の中には、バランスのよい配合飼料以外にも色々ありますので、犬でいうところのドッグフードに相当する配合飼料を選びます。バランスのよい配合飼料を与える限り、基本的に副食は必要ありません。

必須ではありませんが、爬虫類用のビタミンやカルシウムを配合飼料に添加して与えると病気の予防になります。ただし与え過ぎは過剰症の心配がありますので、注意書きにしたがって使用してください。

毎日食べるだけ与えると容易に肥満し甲羅の成長と身体の成長のアンバランスも起こしやすいので、適宜、給餌量や間隔を加減してください。ゆっくり育てることも大切です。

大きく成長したカメは幼児が不用意に手を出さないように管理します。咬まれると危険です。また、ベランダで飼育している場合、逸走(脱走)に注意しないと落下事故などが起こります。

(5) 健康と安全の管理

アカミミガメは基本的に丈夫なカメで、適切な施設で適切な管理をして育てれば、あまり病気はしません。逆に不適切な管理によって長年の歪みを背負って病気になったカメはもはや治療に反応しないような重症となる場合が多いようです。

よくある病気は、カビなどによる皮膚病、日光浴不足による代謝性骨異常栄養症、ビタミンA欠乏症、仲間同士や同居の犬などによる咬傷、逸走（脱走）後の落下や交通事故による外傷（甲羅の損傷を含む）、浅い水深によって手足に体重がかかって起こる手足の皮膚の潰瘍、不衛生な水によっておこる甲羅の潰瘍などですが、いずれも、適切な飼育を心がければ、まずおこらないことばかりです。

健康に飼育できているかどうかの観察ポイントとしては、活動性、食欲、成長の具合、体のプロポーションの変化（池で泳いでいるアカミミガメがおおむね正しいプロポーションの参考になります）などがあります。

(6) その他

なお、ミシシippアカミミガメは、生態系等への影響について文献等で指摘されていることから、更に知見及び情報の充実に努める必要のある外来種として、専門家の間で論議されているので、これから飼育を考える場合は、このようなことを十分考慮する必要があります。

ミシシippアカミミガメの取扱いに係る留意点として論議されている事項は次のとおりです。

- ・飼養者に子供が多くいるとともに、学校や幼稚園等における飼養もなされていることから飼養状況を把握しづらく、規制を徹底させることが現時点では困難である。
- ・輸入と遺棄の禁止が野外における個体数の低減に結びつくとみられ、輸入禁止等の対策効果は高いと推定される。一方で、本種を規制すれば、都市部を中心に大量に遺棄される可能性がある。
- ・本種の規制により、クサガメ、アカミミガメ以外のスライダーガメ属 *Trachemys*、クーターガメ属 *Pseudemys* のようなカメ類が代価のペットとして大量に流通するようになる可能性がある。
- ・安易な愛玩飼養は避け、逸走や遺棄をすることがないように、関係者に普及啓発を行うことが重要。特に、生態や管理の方法について販売者から飼育者に説明し、注意を喚起する事が重要。

3. ワニガメ

(1) 分類、品種

ワニガメ (*Macroclemys temminckii*) はカミツキガメ科のカメで、北アメリカ南東部に分布しています。

(2) 形態、生理、習性

ワニガメは、最大甲長80cm（体重113kg）の記録があり、他の大型のカメと同様に順調に成長すれば、人力での移動もままならない物体と化します。頭部が大きく、魚類を捕食するのに適した鉤状のくちばしを持っています。舌の先にはミミズ状の特殊器官があり、これを小刻みに動かして口の近くに魚をおびき寄せる行動をとりますが、夜間は水底を移動しながら餌を探すことが多いようです。尾も長く、大きな鎧状の鱗が発達しています。頭部と尾部は甲羅の中に完全に収容されることはありません。背甲にはキールが発達していて、強靱な前足や鋭い爪とあいまって、総じて凶暴で危険なイメージを見るものに植えつめます。ただし、外見と実際の性質は別で、不適切な取り扱いをしない限り、積極的に人を攻撃してくる生物ではありません。おおむね四季のはっきりした気候帯の河川や湖沼の水底で生活し、産卵時以外はほとんど上陸しません。日光浴は、浅瀬で水面付近に浮上して行うようです。魚類を中心として口にはいるサイズであるなら、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、甲殻類、貝類など、様々な生物を捕食し、一部は植物質を採餌します。

寿命は飼育下で70年という記録があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

ワニガメはほぼ完全な水棲生物であることから、水槽や池での飼育となりますが、巨大に成長することから、可能な限り大きな水槽や池を用意する必要があります。規格水槽では1,800mm水槽、可能なら水産業用の養魚プールを用意します。"

また、水からあまり出ないとはいえ、脱走の名人ですので、脱走できない設備を作ります。さらに、多くの自治体では条例で危険動物として指定されていますので、規定の条件を満たした飼育施設を用意しないと飼育許可がありません。各自治体の条例を参考にして飼育施設全体をデザインします。

水の深さは、カメが四つんばいになって足と首を伸ばした状態で吻端が水面に出て呼吸ができる程度とします。取り扱い時に危険が生じる動物であることから、大きな排水バルブを設置して、直接個体にさわらずとも換水が出来るように工夫します。水温は、日本の屋外の環境にまかせて問題はありません。ただし、冬季や春先、晩秋はヒーターで水温を管理し、25 ほどが維持できるようにします。無加温で冬越しをさせることもできますが、条件によっては死亡する可能性があります。餌を大量に与えた直後は28 くらいまで水温を上げると代謝が上がって消化が進むようです。ただし、カメがヒーターを破壊する危険性がありますので、カバーなどの保護対策をします。また、海水魚のオーバーフロー濾過システムに見られるように、濾過用の水槽を別に1本用意して、ポンプで水を循環させ、日常的に水を濾過しつつ、大量の排泄がみられたときに全体を換水するという方法も有効です。この方法では、抜気による溶存酸素量の増加（粘膜での呼吸を行うので）、水質の安定、ヒーターを濾過水槽側で安全に管理できるなどのメリットがあります。

照明は、屋外で飼育する限り、日光があたれば十分で、室内飼育の場合でもアカミミガメほどの強い光は必要ないようです。

上陸用の陸場は必要ありません。

幼体は、観賞魚の規格水槽で飼育できます。ただし、将来的には大規模な施設が必要となることを忘れてはなりません。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ワニガメの餌は基本的に動物質を与えます。大きな個体では、週1回、小さな個体では毎日か隔日で給餌しますが、小型の個体は成長させなければならぬので、量だけでなく栄養のバランスにも気を使います。いずれにせよ、かなり餌代のかかる生き物と考えてよいでしょう。

幼体の餌は、市販の配合飼料を中心に口にはいるサイズの生餌を適宜あたえ、体が大きくなってきたら、川魚やザリガニ、マウス、ラット、ウズラなどの全体食を与えます。爬虫類用総合栄養サプリメントを添加して栄養の不足を補います。与える量は、一度に食べるだけを基本に、肥満や体形の異常が出ないように調節します。

基本的に、飼育施設にカメの知識がない人間や子供を近づけないようにします。普通の人には、カメの瞬発的な攻撃スピードをイメージできずに不用意にカメの頭部に手を差し伸べる危険があります。

カメが水槽の中で立ち上がって、壁面を這い登ろうとしたとき、前足が水槽のへりにかからないようであれば脱走の心配はありませんが、しっかりした蓋を付けたほうが無難です。また万が一水槽から脱走しても、水槽の置いてある部屋からの脱走ができないように部屋にはしっかりしたドアをつけ、施錠などを行います。庭の池で飼育する場合は、池のまわりをしっかりとした塀で囲むなどして逸走(脱走)と部外者の進入を防ぎます。自治体の条例に従った飼育施設では、否が応でもこの条件を満たすこととなりますが、幼体を購入する際にはどうしても将来像がイメージしにくいので、あらかじめしっかり認識することが大切です。

ある程度成長した個体にはマイクロチップを注入することができます。逸走(脱走)してしまった場合の個体識別に有効です。今後、河川への遺棄の防止などの観点から、積極的に個体識別措置を講ずることが望まれます。

(5) 健康と安全の管理

適切な管理をしていれば病気になることは少ない生物です。特に大量の排泄物による水質悪化と急激な換水による水質の急変で皮膚や甲羅を傷めることがあります。飼育設備と管理の工夫で予防できます。管理上の危険防止とカメ同士のけがを防止する観点から、一つの水槽に複数飼育することは常識的に考えられませんし、生まれた子供の行き場をもてあますような生物をあえて個人が繁殖するとは考えにくいので、闘争によるけがの心配はあまりありませんが、そのほかの外傷として、執拗に水槽から出ようとしたために足の裏がこすれて潰瘍ができる場合があります。環境を見直し、水深を深めにとって、悪化を防ぎますが、大型の個体では治療も困難です。

甲羅にコケが生えることがあり、これをブラシで除去する必要性を質問されることがありますが、野生の個体でもコケだらけで生活していることから、飼育者の危険を考えれば、水質さえ管理できていれば、あえて甲羅を綺麗にする必要もないと思われます。

(6) 特記事項

河川への遺棄が問題となっています。また愛護動物としての取り扱いもしなければなりませんので、手に負えなくなった場合は安楽死も検討しなければなりません。カメの安楽死は特殊でどこの動物病院でも可能であるとは限らず、また術者に危険が及ぶ場合もあります。

なお、動物園や水族館などにもてあました動物を安易に持ち込んでも、引き取りには限界があり、多大な迷惑をかけることとなりますので譲渡先としては期待できません。

ワニガメと同じ科にカミツキガメがいますが、カミツキガメは外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)の特定外来生物に指定されており、飼養することが禁止されています。

4. スッポン類

(1) 分類、品種

スッポン類は、日本を含むアジア、アフリカ、アメリカに分布するスッポン科のカメで、20種以上に分けます。スッポンの特徴は、甲羅が角質の鱗で覆われていないので、縁などが柔らかいというところです。代表種はニホンスッポン(*Pelodiscus sinensis*、シナスッポンともいう)、トゲスッポン(*Apalone spinifera*)、フロリダスッポン(*Apalone ferox*)、コガシラスッポン(*Chitra indica*)、マルスッポン(*Pelochelys cantorii*)などです。

スッポンは多くの種類がペットとして流通しています。小型のものでも30cmにまで成長しますし、大型のものでは1mをこえる種類がいます。将来的にどのくらいの大きさになるのか把握する意味でも、店頭での種の同定は重要であり、販売に際しては正しい表記が望まれます。

(2) 形態、生理、習性

スッポンの最大の特徴は背甲の表面に角質の甲板をもたず、代わりにうすい皮膚が覆っており、甲羅を形成する骨の板も他のカメより退縮しているため、全体に甲羅がやわらかいことです。また水底にいながらにして呼吸ができるように、甲長と同じくらいの長さまで首を伸ばすことができます。このことは、このカメの攻撃範囲を知る上でも重要です。口は、鋭いくちばし状で、俗に、カミソリのような切れ味と称されます。吻端は2本の管のように突出し、呼吸時に頭を水面から出さなくて済むようになっています。手足は遊泳に特化しており、全体が大きな水かきとして発達しています。陸上での歩行には向きません。

身近に生息するニホンスッポンは甲長30cm程度。コガシラスッポンは1m、体重も100kgを超えます。性質は概して臆病で攻撃的です。水底の砂泥質に全身を隠し、鼻先と目だけを出して獲物を待ち伏せするタイプが多いので、飼育下で全身丸見えな状態はストレスとなります。また、清掃や移動などの取り扱い時に怒らせるとさかんに咬み付いてきます。ほとんどが水中で生活しますが、特に小型の種類では積極的に日光浴をします。寿命はナイルスッポンで37年2ヵ月という飼育例があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

熱帯・亜熱帯性のものは、通年保温が必要です。温帯のものは外気温にまかせてよいですが、冬眠させないならば冬は保温します。水質の管理ならびに飼育施設の規模はワニガメに準じ、水底にはさらさらした細かい砂を敷き、潜ってからだを隠せるようにします。底砂は粒子に角がないものを選ばないと、皮膚や甲羅の皮膚を傷つけてしまうといわれています。水底に砂がはいると、水質の管理はカミツキガメなどに比較して、格段に面倒になります。

日光浴の設備をアカミミガメと同様の条件で設置します。日のあたる場所への水槽の設置も有効です。

スポンの種類によっては、汽水域（淡水と海水が混じり合う河口域）に生息し、水質が高硬度の弱アルカリ性を好むものがあり、サンゴ砂などを濾材に混ぜて水質調節をします。おしなべて水質の悪化には弱く、容易に皮膚病になったり体調を崩しますので、強力な濾過装置と頻繁な部分換水（ただし急激な水質変化を避ける）が重要な鍵となります。

小型種であっても30cmを超え、活発に活動する性質から考えても、飼育水槽は、ワニガメの施設と同等かそれ以上のものが必要で、大型種では、ペット飼育用品の概念から逸脱し、養殖漁業関連のメーカーに問い合わせる必要があるでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

肉食性の種類が多いので、基本は市販の配合飼料でよいでしょう。餌付けが難しい種類もあります。配合飼料をよくふやかして、細長いピンセットやピアノ線に刺して、口もとでゆらすと食べることがあり、まずは人工的な餌の味を覚えさせます。販売されているのはたいてい数cmの幼体なのですぐに食べ始めると思われますが、活きたアカムシから冷凍アカムシ、乾燥アカムシ、アカムシ風の配合飼料、一般的配合飼料といった順で餌を変えていく方法も有効です。入手も大変でコストもかかりますが、大型個体ではワニガメ同様に川魚やマウス、ラットの利用も必要となります。この場合、水質の悪化と過肥に注意します。また、植物質を多くとる種類もいますので、そのような種類は資料を調べた上で、適宜、メニューに植物を加えます。

逸走（脱走）の防止などは、ワニガメなどと同様に留意します。水槽のメンテナンスや給餌時に管理者が咬まれないように、皮手袋や、数十センチの長いピンセットなどを用いて安全を確保します。小さな子供が水槽に近寄らないようにします。

(5) 健康と安全の管理

甲羅の潰瘍を含む、皮膚病が圧倒的に多い生物です。適切な水質が維持できるように、水質管理設備に徹底的に投資しましょう。予防に勝る治療はありません。逆に発症してしまうような環境で飼育されている限り、治療が成功することはありません。

(6) その他の特記事項

やはり屋外への遺棄が懸念される生物群です。巨大な種類はもとより、ニホンスポンの大陸産個体群は、日本の個体群を遺伝子汚染します。水生生物の遺棄は、微生物を含む外来の水圏環境を在来の水圏にもたらすことにもなります。特筆されるような病原性がなかった

としても、外来の微生物は外来動物として認識すべきです。これはもはやカメ 1 頭の問題ではありません。

5 . スッポンモドキ

(1) 分類、品種

スッポンモドキ (*Carettochelys insculpta*) は 1 種でスッポンモドキ科を構成しているカメで、甲羅にはスッポンに似て角質の鱗がありませんが、さわると甲羅が硬いので、スッポンとは違うことが分かります。四肢はスッポンよりもウミガメに似て、オール状をしています。ニューギニアからオーストラリア北部にいます。

(2) 形態、生理、習性

甲長70cmと大型になるカメです。大きな河川の淡水域から河口の汽水域、大きな池・沼などに生息し、魚や貝類のほか、果実などの植物質も多く摂食します。産卵時以外は上陸しません。寿命は17年3ヵ月という飼育例があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

基本的にこのカメは完全水棲で、広い範囲を自由に泳ぎまわりながら生活し、しかも甲長70cmの大型種であることから、飼育施設は少なく見積もっても養魚池レベルのものを用意しないと快適には生活させてやれません。直径5mの丸い養魚水槽の上からHIDランプを照らして、巨大な濾過装置で飼育水を循環させる、といった大がかりな設備が必要なペットです。

(4) 特記事項

屋外に放逐してもまず生存できませんので巨大化してしまったカメを持て余しても、逃がしてあげる、という選択肢は存在しません。

現地で個体数が激減している希少野生動物で、販売されている個体は一切養殖ではなく採集個体であり、これだけ飼育に手間がかかるということからも飼育方法を工夫するより飼育しないことが無難と考える生き物といえましょう。

6 . ホルスフィールドリクガメ

(1) 分類、品種

ホルスフィールドリクガメ (*Testudo horsfieldi*) はリクガメ科のカメで、カスピ海周辺から東は中国まで広い分布をもつリクガメです。日本では初めロシアガメとして売られていました。これは旧ソ連から輸入されたためと思われます。

(2) 形態、生理、習性

甲長が約22cm、丸くて平べったいドラヤキのような形をしたリクガメです。分布が広いため、地域差は存在しますが、野生下では1年の8ヵ月を冬眠ないし夏眠して過ごす特殊なカメです。植物の生えるわずかな期間だけ活動し、あとは穴に潜んでいます。長くて丈夫な

4本の爪と強靱な前足は荒涼とした砂漠やステップ地域で穴を掘るのに適しています。完全な草食性と考えておいてください。

(3) 飼育上必要な設備と機材

日本では冬眠も含め屋外飼育が可能であり、穴を掘って脱走することさえ防げるならば、庭に放し飼いの場所を確保して飼育するのがもっとも健康によいと思われれます。リクガメ全般にいえることですが、運動が大切です。可能な限り広い場所を自由に歩かせることが大変重要です。

室内飼育の場合でも、22cmに成長した個体にとって、市販の飼育水槽は手狭で、十分に広いケージを必要とします。代用品として、コンクリートをこねる桶があります。この桶は軽くて清掃もし易く便利です。これに小動物用の藁を大量に敷いて飼育するとよいでしょう。足場が滑ると、四肢の発達に支障をきたすので、足をふんばって歩いているか観察する必要があります。上手に歩いていない場合は床材を工夫して対応策を決めましょう。

日光浴は不可欠であり、屋外での日光浴の時間を設けることはもちろん、室内ではHIDランプを点灯して、太陽光を補います。飼育当初は、巣穴の安心感を再現するシェルターを用意してやると落ち着きます。大きな植木鉢を半分に切ったものなどが適切です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

わが国でもっとも安価に販売されているリクガメであり、輸入に対して死亡する数が異常に多いカメです。幸い、近年、家庭での繁殖例が聞かれるほど上手に飼育されるようになってきていますので、飼育者はそういった飼育情報を入手してより適切な飼育方法を工夫しましょう。

輸入されたカメはほぼ100%野生採集個体で、大量の寄生虫を持っていることが多いです。現地では共生者として害のない存在だったのでしょうが、捕獲され、流過程で不当な扱いを受けたカメはストレスや脱水症状で弱り、さらに寄生虫がカメの体力を奪い、腸を傷つけ、細菌の二次感染症を引き起こします。

購入と同時に新鮮な便をもって動物病院に連れて行き、検便ののちに適切な処置をしてもらいましょう。最悪のケースでは餌を食べることができないほど弱っていることもあります。このような場合は、麻酔をし、頸に穴をあけ、食道に管を入れ、管を頸の皮膚に縫い付け固定します。体力がもどるまで管から栄養や水分や薬剤を流し込むわけです。一見おそろしげな処置ですが、食べない個体を食べるまで待っているよりはるかに有効な方法です。

餌はなるべく多くの種類の野草や野菜です。桑の葉など、木の葉もよい餌となります。除草剤や農薬の影響のある葉や、毒草は与えないようにしましょう。一部の飼育書にあるような動物質の餌（ドッグフードやピンクマウスなど）は決して与えないこと。

餌から十分な水分を補いつつ、時々温水に体をつけ、大量の飲水と排泄を行います。これは、固体である尿酸を排泄するために「水洗トイレの水」としてストックされている膀胱の水分を新旧入れ替えするために必要なことで、結石の防止にもなります。さらに、温水浴のときには、便をすることがあるので、排泄したての便の検査をしたいときに便利です。

ちなみに、便はコロッとしているのが正常で、練り歯磨き状であったり、葉がそのまま排泄されたり、ドブのような匂いがするのは異常です。すぐに病院で検便を受けましょう。

(5) 健康と安全の管理

適切な餌と、十分な日光があれば、問題なく成長しますが、栄養過多で肥満や甲羅のズレなどを生じた場合は、餌やりのペースをやや落として調節します。ミネラルのサプリメントも適宜あたえ甲羅のカルシウム沈着を補います。

足のふんばりがきかない場所で長く生活すると巻き爪となり、指が変形しますので、歩き方や指の様子を観察しながら、床材を工夫します。

くちばしの変形も起こります。野生状態のカメのくちばしは、ペットショップに行って、入荷直後のカメを観察すれば分かりますので、それらと比較して大きな変形がみられたら、餌が食べにくいなどの障害が出る前に動物病院で麻酔をかけて削ってもらいましょう。

同居の犬などに咬まれたり、ベランダから落下したり、車に轢かれる事故が起こります。甲羅の損傷が軽度ならば治療は可能ですが、事故は予防しましょう。

同居のカメどうして強い個体と弱い個体の差が生じたら、別々に飼育しましょう。同種の仲間に対して思いやりのある生物ではないので、相手が餓死したりストレス死するまでいじめる傾向があります。

冬にはしっかり保温してしっかりライトをあてて飼育するか、しっかり冬眠させましょう。中途半端な温度にさらすと、どちらの生理状態にもいられずに体調を崩して死亡することがあります。なお、冬眠は失敗すれば死亡しますので、繁殖を考えていない場合には、加温飼育が無難です。

(6) その他の特記事項

安いカメなので、やはり飼育放棄が多く目に付きます。とくに甲羅が変形してグロテスクな容姿に育った個体が多く捨てられるようです。不適切な飼育によってグロテスクな形態にしてしまったことも含めて全ては飼い主の責任ですから、途中で投げ出さずに最後まで看取る覚悟を持ちましょう。

7. ケヅメリクガメ

(1) 分類、品種

ケヅメリクガメ (*Geochelone sulcata*) はリクガメ科のカメで、アフリカのサバンナ地帯に分布しています。

(2) 形態、生理、習性

大型で活動的なリクガメです。甲長は70cmを超え、大きな個体は一人の人間では持ち運べないほど重くなります。最大級の個体では、甲長83cm、体重104kgという記録が残っていません。大量に食べ、大量に排泄します。

乾燥系のリクガメで、大変丈夫で、急激に成長します。強大な前足で穴をほり、日中の暑

さをしのぐ習性がありますので、飼育下で放し飼いにしていると、隙間にもぐりこもうとして様々な家具、家財を破壊します。

(3) 飼育上必要な設備と機材

理想的には、牛の放牧場のようなスペースを確保して、広大な敷地を自由に歩かせ、生えている牧草を食べるがままにさせておくのが一番です。実際に、この大きくて活動的なカメを室内に持ち込んで飼育することは、室内でヤギと同居するような覚悟を必要とします。室内では、衣装ケースやコンクリートをこねる桶などに収容しますが、満員電車から一步も出ずに一生を過ごすのに等しい環境ですから、愛護の精神には反します。ただし、放し飼いにする場合、大量の排泄物をまきちらしますので、人間用の紙おむつを付けるなどの工夫をします。また、激しく歩き回り、怪力で隙間にもぐりこみますので、家具を壊されたり、ものを倒されたりしないような場所を選ぶ必要があります。

HIDランプも倒されて火事にならないように設置します。

低温にも耐久性のあるカメですが、冬は保温して飼育します。保温の原則は背中からの強力なライトの照射で、やはりHIDランプが理想的です。腹を温めるマットヒーターだけで保温することは危険なので絶対にはいけません。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は植物食です。巨大な個体は大量に食べますので、餌の確保が大変です。野菜などはコストがかかりますので、桑の葉や葛の葉など、野草を大量に調達します。農地を借りて餌を栽培している人もいます。干草に餌付けると冬の間の餌の管理が楽になります。ヘイキューブやチモシーグラスなど、敷き藁兼用で与えるとよいでしょう。餌を食べたら消化のために、背中に光線をあてて十分に体温上昇させてやりましょう。急激に成長しますので、ミネラルの補給と適切な日光浴が必要です。

庭などで飼育する場合、破壊力があるのでかなりしっかりした囲いを建築しないと脱走します。巨大な個体を自動車が轢いた場合、自動車への損傷が激しく、大変危険な結果を招きかねません。

(5) 健康と安全の管理

脱水と高たんぱくな給餌(大豆など植物蛋白であっても過給は不可)ならびに運動不足で、膀胱結石になりやすく、手術しないと死亡するような重症も多いです。運動で十分に四肢を発達させ、十分に水を与え、かつ適切な餌を与えましょう。日ごろから、白い尿酸が排泄されているか観察を怠らないようにします。呻くような泣き声をあげはじめたら動物病院でレントゲン検査を受けるようにしましょう。

室内で、狭いケージで飼育する際、掃除が行き届かずにジメジメしていると、甲羅が感染症を起こしてしまいます。背中から十分な熱量と明るさをもった光をあてずに、マットヒーターだけを使用すると、過剰にヒーターの上で過ごしてしまい、低温火傷で同様に甲羅が感染症を起こします。ときどき裏返して甲羅の覆面をチェックして、変色したり、じくじくしたりしていないか観察しましょう。

(6) その他の特記事項

巨大に成長したあとの飼育放棄があとをたちません。動物園の入り口に置き去りにしてくるような例が多いようですが、大きなケヅメリクガメを喜んで収容する動物園は存在しません。

8. インドホシガメ

(1) 分類、品種

インドホシガメ (*Geochelone elegans*) はリクガメ科のカメで、インド、パキスタン、スリランカに分布しています。

(2) 形態、生理、習性

背の高いドーム型の甲羅と、黒と黄色の美しい放射模様をもつリクガメです。甲長は38 cmになり、体積を考えればかなり大型のカメといえます。飼育下で24年3ヵ月間生きた記録があります。

モンスーン気候に生息しているため、極端な高温と乾燥、極端な集中豪雨という特殊な気候に適応しています。植物食が基本ですが、他のリクガメよりは動物食に適応しており、飼育下で成長期の一時期、動物性タンパクを給餌することが推奨されています。

雨が降って湿度が上がったときに積極的な活動がみられたり、雨季にあわせて卵が孵化したりと、降雨に生活を依存しているようです。活動時以外の乾燥した季節は穴をほって隠れてすごすことが多いようです。

(3) 飼育上必要な設備と機材

基本的に高温で飼育します。他の爬虫類と同様に昼夜の温度差をつけることは重要ですが、日光浴をさせる場所以外の環境温度を昼30、夜28ほどと高めに設定し、日光浴させる場所では直下で40近くになっても構いません。どちらかという隠遁性の強いカメですので、明るい光線を避けてシェルターに隠れる傾向にあります。必ずHIDランプのような強力なライトか、自然の日光にあたれるようにしましょう。ただし、屋外での日光浴は、農業用の大きな温室の中で日光浴させるなど、外気の寒冷にさらされないような工夫が必要です。

広い運動場所が必要なのは他の全てのリクガメと同様です。室内で飼育する場合は、コンクリートの桶を設置した飼育部屋全体を高温に保ち、各桶ごとにライトを設置します。

基本的には適度な乾燥を維持しますが、他のカメよりも湿度のある場所を好みますので、少し湿った床材に潜れる特殊な場所を別途設置したり、頻繁に温水浴(水温35)させたり、朝夕に霧を吹いてやってもよいでしょう。この場合、時間がたてばすぐに乾燥状態にもどることを心がけ、衛生状態に気をつけます。

子ガメは、雨季の始まりに孵化し、湿潤な環境で成長していきますので、小さなカメを購入した場合は、まず、十分に水を飲ませ、脱水を緩和し、ガラス水槽にヤシガラ土などの床材を入れ、常設の浅い水場をセットし、高温で飼育します。子ガメのうちは脱水に弱く、環

境の悪化に対する抵抗性もないので、成長を促し、危険な時期を早々に脱するようにします。餌の内容やサプリメントに工夫をこらし、飲水・排尿が順調で、代謝が活発なようならば、多少の動物蛋白を与えたり、植物蛋白を強化してみましょ。ただし、腎臓障害や甲羅の変形が起こらないことを確認しながらの微調整が必要です。手間のかけられない人はホルスフィールドリクガメのように植物食だけでかまいません。とにかくホシガメの子ガメは乾燥しないケージで高温を保って飼育することです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は様々な種類の野草・野菜・木の葉を与えます。温度設定が適切なら毎日食べるだけ与えるようにしてもかまいませんが、肥満にならないように手足の観察をしてください。モンスーン気候の乾季では、おそらく青々とした植物にはありついていないことを考えると、大きな耐久性のある個体には乾季のような雰囲気(給餌(飲み水を少なく、干した野菜などを与える)をしばらく続けたのち、人工的に毎日大量のシャワーを浴びせて水浴もさせ、瑞々しい植物やビタミン・ミネラルのサプリメントを大量に与えると、一年のメリハリが出て、繁殖行動を誘発できることがあります。性成熟に達しないカメはこの限りではなく、年間を通して十分な餌を与えます。

(5) 健康と安全の管理

温度を下げないことが各種の感染症の予防となります。繁殖個体を販売するイベントにでも足を運ばない限り、販売されているカメは例外なく野生個体なので、大量の寄生虫がいたり、輸入のストレスで弱っていたりします。まずは、完璧な飼育施設に迎え入れ、十分に水を飲ませ、獣医の手によって駆虫を受けます。

温度管理は防水性のある精度の高いヒーターとサーモスタットを用いて行い、不意の故障にそなえて予備のセットも用意しておきます。最近では昼夜の差をつけたりタイマー機構をもったサーモスタットも販売されていて便利です。

子ガメは10mg単位で計れるキッチンスケールで体重測定をし、成長具合を記録して健康管理の目安とします。

9. アカアシガメ

(1) 分類、品種

アカアシガメ (*Geochelone carbonaria*) はリクガメ科のカメで、中央アメリカ南部から南アメリカに分布しています。

(2) 形態、生理、習性

細長いドーム状の甲羅と、手足の鮮やかな紅色の模様が特徴です。大きさは50cmに達し、家庭で飼育するカメとしては明らかに巨大です。類似の種類にキアシガメがいますが、こちらは80cmを超えるためもはや動物園動物と考えるべきでしょう。

熱帯雨林の林床を徘徊し、野草や落下した果物、きのこ類、動物の死体などを食べている

ため、植物メインの雑食性といわれています。雨季と乾季はあるものの、通年、湿度の高い環境で生活していると考えてよいでしょう。日のあたらない林床で暮らすせいか、隠遁性が強いですが、日光浴も必要とします。寿命は野生で13年8ヵ月という記録があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

広い場所で、高温（30 前後。最低25 ）と適度な湿度を保ち、絶えず綺麗な温水に浸ることができる環境を用意します。暗い場所を用意し、隠れられるようにし、開けた場所にはHIDランプを照射し木漏れ日を演出します。おそらくホシガメと同様に、部屋ごと保温して最低温度を確保するのがよいでしょう。季節の変わり目の低温であっけなく命を落とすことがあります。

保湿性の高い床材として赤玉土やヤシガラなどが推奨されますが、室内で衛生的に飼育するにはとうてい管理しきれるものではありません。土の上で飼育することを考える場合は、農業用温室に観葉植物を植え、熱帯植物園のようにして、そこで放し飼いにするような施設が必要でしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は野菜や野草を中心に、果物類も添加します。果物は他のカメでは偏食に陥るうえに餌として適さないものですが、アカアシガメでは、積極的にメニューに加えてよいようです。ただし、あまり多くを占めないように与えます。そのほか、動物性の餌として、ピンクマウスやドッグフード、精肉類、九官鳥の餌なども与えます。これも多給による害をいつも考えながら与えましょう。

(5) 健康と安全の管理

繁殖個体が流通のメインを占めるめずらしいリクガメですが、依然として野生個体も多くみられますので、入手時の管理が重要です。まず駆虫をすること。適切な環境で十分水を与えて腎臓機能を保護します。

また、ヘルペスウィルスのキャリアとして知られていますので、発症なく家に持ち込まれ、他のカメに感染する危険性もあります。購入した店で売られている他のカメ、たとえば発症しやすいホルスフィールドリクガメなどに異常がみられないか確認しましょう。もし異常があるカメが他にいた場合、ペットショップ内で感染し、キャリアとなっている可能性は否定できません。

〇ヘビ

ヘビ類は、トカゲとともに有鱗目にいれられヘビ亜目とされます。独立のヘビ目とされることもあります。種類は2,300種以上。ヘビには四肢が無いのが普通ですが、原始的なヘビであるボア・ニシキヘビ類とミミズヘビ（メクラヘビ）類は後肢の痕跡があります。

10. ナミヘビ類

(1) 分類、品種

ナミヘビ類はナミヘビ科のヘビで、1,500種以上のヘビが含まれています。ネズミヘビ ナメラ（*Elaphe*）、キングヘビ（*Lampropeltis*）、ゴーフアーヘビ（*Pituophis*）、インディゴヘビ（*Drymarchon*）などの無毒蛇は、ペットスネークという言葉に代弁されるように、品種改良が行われ、もはや野生から捕獲せずとも累代繁殖した子孫のみで必要な個体数の生産がまかなわれている、きわめて稀な爬虫類群です。"

これらの蛇は、適度な大きさの飼育ケージと新鮮な水ならびに餌としてのげっ歯類が用意できれば、特殊な機材すら必要なく容易に繁殖まで楽しめます。

(2) 形態、生理、習性

ナミヘビはおおむね50cmから2m以内のサイズの種類がペットとして一般的です。

いかにも蛇らしい普通の特徴を備えており、顎は大きく開き、大きな餌が飲めます。手足が無く体が細長いので、餌は胴体でしめつけて窒息させつつ、餌の体そのものを細長く締め上げて飲み込みやすくします。俗にいわれるように骨をバラバラに砕くというのは迷信です。

昼に活動するものもいれば夜に活動するものもありますが、おおむね飼い主の都合で餌を食べてくれますので、是が非でも日光浴が必要で世話のサイクルが動物中心となるカメとは大きく異なります。

餌は、ポピュラーなペットスネークの場合、100%げっ歯類で足りります。餌用に養殖された、様々なサイズのマウスやラットが冷凍状態で販売されていますので、これだけを与えておけば問題ありません。

巣穴をもつ種類がほとんどなので、隠れられる場所が必要です。また、寿命は野生でアオダイショウ12年、フロリダキングスネーク12年、インディゴスネーク11年6ヵ月という記録があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

ヘビは爬虫類の中でも、場所をとらずにコンパクトに飼育できるといわれています。たとえば、飼育ケージの長径はヘビの全長の3分の2、短径はトグロの直径の1.5倍もあればよい、といった具合です。1mちょっとのヘビでも無理をすれば60cmの規格水槽で生涯飼育することができます。

ただし、これはあくまでもヘビに遠慮してもらっているに過ぎず、たとえば、国産ヘビで

最も頻繁にペットにされるアオダイショウなどは、環境抵抗を受けやすく、狭いケージで育成すると野生で見られるような大きな個体にはなかなか成長しません。途中から大きなケージに移し替えるとみるみる成長して、体格すら違ってきます。狭い部屋でたくさんのヘビをコレクションしたり、どんどん繁殖させていきたい人はスペースの関係でよりコンパクトな飼育を余儀なくされますが、たとえば1匹をかわいがり鑑賞したい人は、大きなゆとりあるケージに、木や岩などを配してゆったりと飼育してやるとよいでしょう。

ケージの大きさは、 W (ヘビの種としての最大全長の倍) \times D (ヘビの全長) \times H (ヘビの全長) くらいにしてやると、ヘビ本来の美しい体型に育ち、種としての興味深い行動も観察できるようになります。

ナミヘビにはペット化されている種類だけでもきわめて多くの種類が含まれ、中には、高温を嫌い、日本の夏を越せない種類もいます。一方で、しっかりと保温して飼育しないと消化不良や感染症で死んでしまう種類もいます。冷房か保温か、飼育する種類にあわせてしっかり設定してやりましょう。

ヘビはよく水を飲む生き物です。また、暑いとき、脱皮のとき、体表にダニが付いた時など、全身を水に漬けることがあります。ヘビがひっくりかえせないくらいの適度な重さがある、中でトグロをまいても水がこぼれない程度の容量のある水入れを用意しましょう。

巣穴で生活するヘビは、トグロがすっぽり収まるくらいの隠れ家を必要とします。シェルターともいいますが、市販のものや、植木鉢を削ったものを用意します。極端に樹上性に依存した種類では、天井付近に巣箱をつけてやると、掃除のときにヘビを驚かせずに済むので便利です。そういった種類には木登り用の横枝を渡してやり、その枝にケージの外からスポットライトをあててやると、食後に腹を温めにきます。それができない場合は、ケージの底の一部、マットヒーターを敷いて、腹を温めて消化を助ける場所をつくります。食後の低温はヘビの寿命を縮めます。

コンパクトに大量に飼育したい人は、引き出し式のケージ、ラックを用います。市販のものもありますが、サイズに限りがあるので、日曜大工で自作することになります。プラスチック製の押入れ用収納ケースの桶の部分だけを用意して、それがすっぽりおさまるような本棚風の枠をつくります。通気穴をあけたケースを差し込んでおけば、ラックの棚板がケースの天井として機能し、ヘビは逃げられず、世話をするときには適宜引き出すという仕組みです。ケースのサイズが色々を選べますので、ヘビの大きさに合っていて、なおかつコンパクトに収納できる飼育施設が作れます。ケースの底には必要ならマットヒーターを敷きます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌はマウスを解凍して、38 くらいの温度にして与えます。30cm以上ある長いピンセットで、餌をヘビの前に持っていか、ケージに横たえて放置します。

ヘビが大きな餌を飲み込めるからといって、無理矢理大きな餌を与えてはいけません。概ねヘビの頭部と同じか、やや大きい程度の大きさのマウスをヘビの食欲にあわせて好きなだけ与えます。腹がはちきれんばかりに大量に食べた場合は、ヒーターで十分に暖をとらせま

す。ヘビは消化能力に種差や個体差が大きく、あくまで自分の飼育している個体がどのくらい食べてどのように消化するのか、よく観察しましょう。確実に消化された、密度の濃い、少量の便となって排泄されるように給餌の量と間隔を決定します。

脱皮の前は餌を食べません。目が白くなり、色がくすみ、やがて目がもとどおりの色になると、しばらくして脱皮がみられます。脱皮前に無理に捕獲したりして皮膚に傷がつくとそこから脱皮に必要な水分がうばわれて脱皮不全となります。脱皮前にも食べるような個体であっても、やはりこの時期はそっとしてやるのが無難です。

なお、脱皮前は一時的に湿気を要求しますので、ミズゴケの入った容器などを設置して脱皮不全を予防します。

餌は、マウス類だけで問題なく、たまに、爬虫類用のビタミンサプリメントを添加します。ヘビは匂いに敏感なので、サプリメントはゼラチンカプセルに入れて、マウスの皮膚の下に忍ばせませす。消化力の弱い個体を飼育している場合、マウスの尾と手足は除去し、背中 of 皮も除去してやると、消化の助けになります。また、毛のはえていないピンクマウスのような小さいサイズの餌を与えることも消化不良の予防には有効です。

給餌と排便のペースを一定に保ちながら、適宜掃除をします。床材は新聞紙を幾重にも重ねたものが最適で、汚れた紙から順に捨てていくことでヘビにストレスを与えることなく管理できます。

水はなるべく頻繁に綺麗なものと交換します。

ヘビは餌と飼い主の指を区別ができない場合があります。餌やりには必ず長いピンセットを使い、マウスの臭いが手につかないように注意します。もしかまれたらテレホンカードなどを指と顎の間に差し込んでゆっくりとはがします。無理に引きはがすと飼い主のけがも悪化しますしヘビの顎もこわれます。

ヘビは脱走する生物です。1度や2度は必ず逃げるといっても過言ではありません。

ケージは逃げないような工夫をして、逃がさないような管理をすることはもちろん、飼育ケージのある部屋からヘビが外に出ないように飼育部屋の入り口がしっかり閉まるようにします。ヘビが逃げたら、まず、ミズゴケの入ったシェルターなどを部屋の四隅にしかけ、喉がかわいたときにもぐりこむように仕向けます。このようなトラップは念のため、飼育室の外にもしかけ、定期的に見回るとよいでしょう。

ヘビは一般社会において存在自体が迷惑と思われるといっても過言ではありません。集合住宅などで、ヘビが隣家に飼われていると知っただけで眠れない人もいます。脱走したヘビが自宅に侵入してきたら生きた心地がしないでしょう。動物病院への通院も同じです。犬や猫を抱いた飼い主と隣り合わせで順番待ちをする際、中身が見えなくても、患者がヘビだと知ったとたんに気絶する犬の飼い主がいるかもしれませす。迷惑防止という観点からいえば、飼育そのものが迷惑となりうる生物であることを自覚し、社会との調和に努めましょう。

(5) 健康と安全の管理

ヘビは適切な環境と餌を整えやすいペットなので、めったに病気はしませんが、湿度不足による脱皮不全や湿度の過多による皮膚病などは頻繁にみられます。

大きすぎる餌、与えすぎ、食後の低温での消化不良も要注意です。油の浮いた下痢便や嘔吐がみられたらまず餌やりの方法を見直すべきです。

複数での飼育は避けるべきです。餌をめぐる、2匹がからみあい、どちらも命をおとすことがあります。

養殖個体中心のペット爬虫類であるにもかかわらず、伝染病の進入が後をたちません。コバエやダニ、水入れの共有が飼育施設内での感染に一役かっている様子です。新参個体の検疫も大切です。野生のヘビなどはむやみに持ち込まないようにしましょう。

(6) 特記事項

餌の冷凍マウスは家庭用の冷蔵庫とは別に管理しましょう。不衛生です。

ナミヘビ類のなかには「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（特定外来生物法）により特定外来生物に指定されているものがあります。

11. ボア・ニシキヘビ類

(1) 分類、品種

ボア・ニシキヘビ類はボア科のヘビで50種以上に分けられています。アジア、アフリカ、オーストラリア、アメリカと全ての大陸にいます。5mを超える巨大な大蛇も含みますが、小さな種類、中型のものもたくさんいます。ボア類は卵胎生で、ニシキヘビ類は卵生です。主な種類は、ボールニシキヘビ(*Python regius*)、アミメニシキヘビ(*Python reticulatus*)、ビルマニシキヘビ(*Python molurus bivittatus*)、ミドリニシキヘビ(*Morelia viridis*)、カーペットニシキヘビ(*Morelia spilotes*)、ボアコンストリクター(*Boa constrictor*)、エメラルドツリーボア(*Corallus caninus*)があげられます。

(2) 形態、生理、習性

ボールニシキヘビ、ミドリニシキヘビ、エメラルドツリーボア、カーペットニシキヘビなどは全長が1.5m前後。大きくても2mほどで、大蛇というイメージがありませんが、アミメニシキヘビでは最大7m近くまで、ビルマニシキヘビも4m近く、ボアコンストリクターが3mほどにまで成長し、太さや重さを考慮すると、人が一人で取り扱えない大きさの生物になります。事故が起きる、起きないは別として、人を殺傷する能力をそなえたペットだということを自覚しましょう。

完全樹上性(ミドリニシキヘビ、エメラルドツリーボア)から半樹上性、地上性(あるいは地中性)まで様々な生活様式を持ちますが、完全樹上性のものを除けば、基本的にはナミヘビの飼育の延長線として考えることができます。体のサイズにあった様々な生物を捕食し、おおむね熱帯雨林や熱帯サバンナに生息しています。

一度に100卵を産む種類もあり、安易な繁殖はお勧めできません。寿命は野生状態で、ボ

アコンストリクター38年8ヵ月、アミメニシキヘビ25年3ヵ月という記録があります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

大きくなるとはいえ、破壊的な生物ではなく、かつ運動量も限られているので、大蛇のイメージの割には狭い場所に押し込めて飼育することができます。市販の120cm幅の爬虫類ケージでも2.5mまでの大蛇は飼育できますし、環境抵抗で、成長が止まる個体も多いようです。

しかし、アミメニシキヘビやビルマニシキヘビは、普通に飼育していても楽に4mに到達しますので、種の最大全長に達していなくても、もはや普通のケージでは飼育できません。しかも、各都道府県の条例によって規制されている種類も多いので、まずはその規制にしたがってケージをデザインします。巨大な飼育ケージの中にはヘビの入れるプールを設置します。プールは大量の排泄物で汚されますので、掃除のしやすい設計が必要です。ハンドリングによく慣れた個体で、脱皮不全を起こしても人間の風呂場で治療できる場合は、ケージにプールは必要なく、大きな水入れ程度でかまいません。

完全樹上性の種類は、高さのあるケージの中段に止まり木をセットし、ケージの床に大きな水入れを設置してやり、ケージの前面を布などで目隠しすると落ち着いて飼育できます。水入れは主として湿度の維持と水浴のためで、飲み水は別途、朝夕の散水によって補います。水は気温と同じくらいまで温めて散水します。ケージの床は排水機構を持たせません。

いずれの種類も昼は28 前後、夜間は26 前後を維持し、餌を与えたあとは特に床暖房で腹を加温してやります。

巨大に成長したヘビにはもはやシェルターは必要ありませんが、孵化したての子ヘビの頃は用意してやると落ち着きます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ボア・ニシキヘビの仲間は大型になる種類が多く、飼育の基本的な部分はナミヘビと同じですが全てにおいて規模が異なりますので飼育には相当の覚悟が必要です。ナミヘビ程度の飼育設備で飼育できるボールニシキヘビは、大蛇の中でもペット向きといえる種類です。丈夫で、それなりに大蛇の風格を持っていますが、一年のうちで餌を食べる時期が限られていて、食べる時期に一気に食べさせて体格と栄養を備蓄させ、食べない時期には、水を新鮮に保つだけで一切干渉しないといった特殊な管理をします。近年では、品種と呼べるカラーバリエーションも生まれ、繁殖方法も確立されたので、大蛇をペットとしたい人は、ボールニシキヘビを飼育するのが最良の選択といえましょう。

樹上性のミドリニシキヘビやエメラルドツリーボアは神経質で、温度や湿度の要求が厳しく、多くは野生採集個体であるため、初心者には不向きです。始めに完璧なケージセットをして、あとは個体が慣れるまで、ケージを布で隠して一切干渉せず、小鳥や生きたピンクマウスなどを駆使して餌付けを行います。寄生虫が多いので、餌付いたらすぐに餌に駆虫薬を仕込むか、いちばん最初の導入時に一気に駆虫を完了してからケージに入れるようにします。飼育者をケージ越しに攻撃してくる個体は容易に吻端をけがして、口腔内潰瘍などになりま

す。「大きくて背の高いケージに止まり木をつけて湿度を高くとり通気も確保し、高温を維持して、目隠しをして干渉しない。」これらの基本を守っても最後まで餌付かず死亡するケースも多いです。

ボアコンストラクターは温度を高めに設定して餌と飼育ケージをサイズアップすれば、ナミヘビと同じような感覚で飼育できます。飼育下の繁殖個体がペットとして出回ることが多いので、性質も温和で、事故も起きにくい種類といえますが、条例に合致した完璧なケージを用意する必要があります。

大蛇を飼育する上で問題となるのは脱走した場合に巻き起こる社会不安や、ケージの設定ミスによる火災の発生などです。強化ガラスの水槽も、水入れと水槽の間にヘビがもぐりこんで力めば割れますし、保温球やライトがケージの中にあれば、これも破壊される危険があり、火災の危険が生じます。風呂や日光浴を、犬の散歩よろしく外で行えば、脱走の危険も増します。二重三重の安全策をとって、飼育に臨むべき生物です。

(5) 健康と安全の管理

新しい個体の導入によってウイルス疾患がアウトブレイクしたり、保温設備の作動不良で一夜にして風邪や消化不良になったり、保温器具によって火傷をしたり、活きた餌の逆襲によってけがをしたり。詳しく観察して上手に管理すれば予防できることが多いので、基本に忠実に細かい配慮を持って飼育しましょう。

アウトブレイク：突発性に感染症が発生し、次々と伝播していく様子。

(6) 特記事項

歯が鋭くて長く、たくさん生えています。かまれると相当なけがとなります。普段から飼育者の動きと餌を関連づけないような取り扱いをしましょう。長いピンセットやスネークフックやスネークトング、肩まである革手袋など、安全を確保するための道具もそろえましょう。

○トカゲ

トカゲ類は、ヘビとともに有鱗目にいれられ、トカゲ亜目とされます。独立したトカゲ目とされることもあります。種類は3,400種以上で、種類は現存する爬虫類では最も多いグループですが、四肢の有るもの、まれですが二肢のもの、無いものなど、外見上も変化の多いグループです。四肢の無いものはヘビと似ていますが、動くまぶたがあったり、尾が自切したりして、ヘビには無い特徴をもっています。餌は種類によって様々なものを食べます。

12. ヒョウモントカゲモドキ

(1) 分類、品種

ヒョウモントカゲモドキ (*Eublepharis macularius*) は、ヤモリ科のトカゲモドキ亜科に属するトカゲです。独立した科にすることもあります。トカゲモドキ類はアジア・アフリカ・アメリカに20種以上が分布しています。日本には南西諸島(沖縄・徳之島など)にいます。トカゲモドキのなかで最もよく知られているのが、パキスタンやアフガニスタンなどに分布するヒョウモントカゲモドキです。飼いやすく、繁殖が容易なことから、様々な体色や模様の変異が作られています。

(2) 形態、生理、習性

トカゲモドキとは妙な名前ですが、ヤモリでありながら、指に壁などに登るための吸盤が無い、動くまぶたが有るなど、ヤモリ科の他のヤモリと違って、他のトカゲ的な特徴を持っていることなどからトカゲモドキとつけられています。英名はレパード・ゲッコーとかファット・テイルド・ゲッコーで、ヒョウモントカゲモドキのヒョウを思わせる模様と、栄養がよいと尾が太くなるという2つの特徴を捉えています。レパードはローマ字読みするとレオパードで、レオパなどといわれるのはこれに由来します。寿命は飼育下で28年という記録があります。実際には10年を超すものはそう多くないと思われます。全長25cm位で、本来は夜行性です。卵生で、普通は2個産卵します。生まれたばかりの子は濃い横縞があり、斑点は成長につれ、徐々に出てきて、それにつれ横縞が消えていきます。慣れやすく、小さいので、危険性はありません。臭いはたいしたことはありませんが、健康管理の面からもあまり汚れないうちに清掃します。声は出しますが大きいものではありません。

(3) 飼育上必要な設備と機材

ヒョウモントカゲモドキの場合、床には何もなくてもよいのですが、新聞紙を敷いたり、小砂利を入れるのもよいでしょう。細かい砂は好まないようです。隠れ場所(シェルター)は必要です。市販のシェルターもありますが、新聞紙を入れれば、その下がシェルターになります。また、厚紙を波状に折って入れても構いませんし、板でU字溝のように作ったもので構いません。下に隠れられれば、それがシェルターとなります。排水はこのヒョウモントカゲモドキのように小さい種類の場合どちらでもよいと思いますが、ケージを水洗いする時

には、あったほうがよいでしょう。ケージに排水孔を付けると、脱走経路（トカゲも餌も）にもなります。温度は25～30℃。20℃以下または32～33℃以上にはしないほうがよいでしょう。湿度はやや乾いたという程度にし、水入れは簡単にひっくりかえらないものを用意します。水はいつも忘れずに、綺麗なものをに入れておきます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌はフタホシコオロギ（クロコオロギともいう）などのコオロギ類、バッタ、蛾、ミルワームなど昆虫類、クモ、ミミズなどで、ピンクマウスもよい餌です。初めての餌は食べないことがあるので、普段から色々与えるのがよいでしょう。主食としてはコオロギで、栄養を高めるためにピンクマウスを時々与えるのがよいでしょう。ヒョウモントカゲモドキは馴れやすいので、餌はピンセットでいつも与えるようにすると、人の接近を恐れなくなります。清掃のとき恐れがないように移すなど、色々根気よく工夫してください。あまり器用ではありませんから、ふたは必要ないかもしれませんが、逃げることを考えてふたをしておいた方がよいでしょう。注意することは、脱皮がうまくいかなかった時のことです。指先に脱け殻がたまと爪や指の脱落の原因になるので、気をつけピンセットなどで取り除きます。繁殖期に雄同士は争うので、雄は1ケージに1頭にします。雌同士の同居は可能です。繁殖制限は雄を別にすればよいでしょう。雄・雌は幼体では分かりませんが、成熟すれば、雄は肛門の少し上の鱗に前肛孔がはっきりするので、あまりはっきりしない雌とは区別できます。個体識別は大きさ、模様などでします。模様は変わりますから、時々チェックしてください。時々で間に合いますが、いつでもというのは忘れやすいもので、毎月1回など、忘れにくい習慣を作っておくとよいと思います。

(5) 健康と安全の管理

主な病気の予防としては、入手時に動きがよく、体に張りがあり、口元や、肛門の周りが汚れていない個体を選びます。飼っていて病気はあまりしないように思われます。温度管理、栄養管理をしっかりとってください。尾が太いのは栄養がたくわえられている証拠です。ケージ内はあまり神経質になることはありませんが、清潔にしてください。清掃の時などに体の状態をチェックしてください。無理に捕まえるのはよくありません。

(6) その他特記事項

サルモネラ菌などがいると思って、触ったら必ず手を洗ってください。小形の動物でもあり、事故を防止する観点からも部屋での放し飼いには向いていません。

13. グリーンイグアナ

(1) 分類、品種

グリーンイグアナ（*Iguana iguana*）はイグアナ科に属すトカゲです。イグアナ科は600種を超す大きな科です。最近、この科を数科に分ける研究が発表されていますので、いずれはそちらに移行するでしょう。単純にイグアナといった場合、イグアナ科のトカゲを指す場

合と、グリーンイグアナを指す場合があります。グリーンイグアナはアメリカ大陸のメキシコからブラジル南部、パラグアイまでと、西インド諸島に分布します。以下の「イグアナ」は「グリーンイグアナ」を指します。

(2) 形態、生理、習性

グリーンイグアナは、小さい時は緑色でかわいらしく、つい飼いたくなりますが、大きくなると、小さい時とは違い見事な容貌になり、なかなか魅力的です。餌が植物質なので飼いはじめは簡単です。寿命は飼育下で20年近く生きたものがありますが、10年以上生きることは、そう多くはありません。全長1.8m位になります。

(3) 飼育上必要な設備と機材

グリーンイグアナは樹上性のため、ケージは他のトカゲ類より広さ、高さを必要とします。水入れはイグアナが入れるくらい大きいものを用意し、水の量はイグアナが入ってもこぼれない程度にします。イグアナは体が大きくなるので便で飼育設備内を結構汚します。樹上性ですから、床だけでなく、とまり木にも壁にも便が付きます。イグアナは自分の便で体が汚れるのをまるで気にしません。その汚れた尾をふって抵抗されると嫌になります。ケージを清掃するには水洗いが一番です。ですから、排水を十分考え、排水孔を付けてください。温度は25～30 位にしますが、温度差がつけられるのなら夜は22～23 位にしましょう。日光浴はさせたほうがよいでしょう。室内なら日当たりのよい所に置いてください。梅雨明けから9月まで、可能なら屋外飼育が望ましいでしょう。ただ元気がでると野性が戻るのが、また馴れにくくなってしまうようです。健康か馴れか、どちらをとるか難しいところです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は子供の時は昆虫類も食べますが、基本的には植物質を食べます。動物質は成長初期か体力が衰えているとき以外は、あまり与えない方がよいでしょう。植物質なら家庭で食べるものでよいと思われがちで、またよく食べて成長しますが、ここに落とし穴があります。野生のイグアナが食べているのは野生に生えている草や木の葉、果実などです。あまりカロリーの高いものは食べていません。野菜や果物では高カロリーですし、含まれているものも違っています。フライ(「Iguana : Guide for successful captive care.」Fredric L. Frye 著 / 1995年 / Krieger Pub Co 1995年)によると、与える餌にはカルシウムがリンの2倍以上の比率で含まれていないと、カルシウムがイグアナの体から流出して失われてしまうのだそうです。イグアナの飼育が難しいのは、このバランスがうまく取れないせいでしょう。野草・木の葉を中心に野菜・果物を少し加えていくやり方がよいでしょう。フライの本には、主食ではありませんが、餌の一つとして、冷凍のミックスベジタブルや、豆腐もあげられています。給水は体がつかるくらいがよいでしょう。床、壁、樹上と移動できるよう、枝を配置します。

イグアナはあまり人を恐がりませんから、掃除していると寄って来て出ようとしています。勝手に出させて後で戻るか、つまんで向きを変えたりします。無理やり捕まえてはいけません。掃除の時は、窓際での日光浴もよいでしょう。個体によっては、飛び出して逃げるものもい

ますので、こういう個体には十分気を付けて出さないようにしてください。

グリーンイグアナの性質は比較的温和で、上手に扱ってやれば、よいペットになります。動物を扱う場合、こちらが構えると動物も構えます。最初は逃げるかもしれませんが、気長に少しずつ触れてください。怯えている時は深追いしてはいけません。グリーンイグアナは、すぐ驚いて走りだします。走りだしても、ぶつからないだけの広さがあればよいのですが、なかなかそうもいきません。機会あるごとに触れて、餌もピンセットから摂るように続けます。顎の下に触れられるようになればあとは時間だけです。片手を前足の間に差し込んで少し体を持ち上げます。繰り返しながら、今度は後足です。こうして続けていきますが、気を付けなくてはいけないことがあります。まず爪が結構鋭いということです。ほんとうに小さいときはよいのですが、少し大きくなると、押さえたりする時に暴れると、私たちの肌には簡単に引っかき傷ができます。大きくなるとおとなしくても、体に這い上がらせたりすると、やはり引っかき傷ができます。これはイグアナにとってどうしようもないことなので、飼う側が自衛しなくてははいけません。厚手のシャツを着たり、革手袋を着けたりしてください。嫌なことをしたら、口を開けて咬もうとします。歯は小さいですが鋭く、かみそりのように切れます。咬まれないように撤退します。ここで殴ったりするとだんだん性格が悪くなっていき、果てはどうしようもなくひねくれた個体になるかもしれません。根気と我慢が必要です。

また、雄は大きくなると気が荒くなり、他に雄がいればけんかをはじめます。逃げる広さがあればよいのですが、逃げきれないと大けがをします。したがって、雄は分けて飼うしかありません。触るのも避けた方がよいかもしれません。これは個体次第です。飼育しているだけなら、迷惑とか危害とかは、本質的にはありませんが、逃げだしたら、大きいし、不安をあたえることは間違いありません。絶対に逃がしてはいけません。

個体識別は少数なら、傷痕など、その個体のもつ外観の特徴で区別できますが、数が多いようでしたらマイクロチップを注入することを検討してください。

(5) 健康と安全の管理

主な病気と予防としては、風邪・肺炎が挙げられ、飼育温度が低いとかかりやすくなります。爬虫類の飼育は、温度管理ができれば半分は成功したといってよいでしょう。季節の変わり目には加温が難しいことがあります。風邪などのほか皮膚病も起こりやすい病気です。

また、グリーンイグアナは、すぐ驚いて走りだし、壁などにぶつかって口先をつぶすことがよくあります。その他、金網のケージでは金網に爪や指をひっかけ、爪や指先を脱落するようです。

火傷についても注意が必要です。暖房用の電球や床暖房で起こります。かなりの低温にセットしておいても起こることがあります。

(6) その他特記事項

グリーンイグアナはサイテスの附属書IIに属し、養殖されたものが輸入されています。

グリーンイグアナは値段も安いし、餌が植物質なので、簡単に飼いはじめられます。しかし

動物が安いわりに、暖房など設備に金がかかり、すぐ大きくなりますし、病気にもなりやすく、結構やっかいです。よく逃がして世間を騒がせたりもします。グリーンイグアナの飼育は、一見簡単なようですが、トラブルも多く、普通の家庭向きの動物ではなく、動物園や水族館のような施設に任せるべきです。

14. フトアゴヒゲトカゲ

(1) 分類、品種

フトアゴヒゲトカゲ (*Pogona vitticeps*) はアガマ (キノボリトカゲ) 科のトカゲで、オーストラリアの中東部の内陸部に分布します。フトアゴヒゲトカゲの属するアゴヒゲトカゲ属は8種が含まれて、一部重複しながら、オーストラリアに広く分布しています。

フトアゴヒゲトカゲは体色が美しく、繁殖が容易で、美しい色の品種が生み出されています。

(2) 形態、生理、習性

アゴヒゲトカゲの名は、驚くと口を開けて喉の「あごひげ」を広げて威嚇することからきています。フトアゴヒゲトカゲの「あごひげ」は、近縁のヒガシアゴヒゲトカゲの「あごひげ」ほど見事ではありませんが、体色の美しさでは断然優れています。寿命は飼育下で10年生きた記録があります。全長は約50cmを超えるものがありますが、通常は30cm位です。危険性はありません。臭いはたいしたことはなく、鳴き声も出しません。

(3) 飼育上必要な施設と機材

全長30cmのものなら60cmのケージで2～3頭飼えます。床が乾いた状態に保ってやります。温度は高めがよく、30度を少し超すくらいにし、夜は温度差をつけるなら20度程度にするとよいでしょう。日光浴はさせたほうがよいのですが、体温が上がった時に逃げ込めるような日陰を作っておきます。

乾燥地帯のトカゲなので、湿度は考慮しなくてよいでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

フトアゴヒゲトカゲの餌の狩猟方法は座って待つやり方です。近寄ってくる昆虫やクモなどの無脊椎動物、カエル、トカゲ類、小鳥などの動物質を半分食べ、残りの半分は植物を食べています。飼育下の餌はコオロギ、ミルワームなどの昆虫類、ピンクマウス、小松菜、クローバー、タンポポ、果物などです。危害などは特に考える必要はありませんが、顎の力がありますから、気をつけてください。

繁殖は容易ですから、繁殖制限するより、きれいな品種を増やした方が得策かもしれません。増えすぎて困るようでしたら、雌雄を分けて飼うか、孵化させないようにすればよいでしょう。個体識別はよく見ればたいてい区別点はありますが、数が多い場合はマイクロチップを注入すればよいでしょう。

(5) 健康と安全の管理

脂肪肝はアゴヒゲトカゲ類によく見られる病気で、肺炎も多い病気です。これらは飼い方や餌、飼育温度が適正ならば防げます。観察はいつでも重要です。太っているように見えても栄養が偏っていることがあります。高カロリーな餌は減らしていくべきでしょう。清潔には神経質になりすぎることはありませんが、適度の実施してください。

15. カメレオン

(1) 分類、品種

カメレオンはカメレオン科のトカゲで、80種以上がアフリカとマダガスカルに半数ずつ、ほかに地中海沿岸から中近東にかけて数種分布しています。

(2) 形態、生理、習性

カメレオンの特徴は体の色を変えること、舌をのばして餌をとること、などです。

寿命ははっきりしませんが、ジャクソンカメレオン(*Chamaeleo jacksoni*)が9年9ヵ月、バンサーカメレオン(*Furcifer pardalis*)が5年2ヵ月などと長い記録がありますが、実際には飼育は極めて難しく、2～3年生きれば大成功で、1年生かせても立派です。

全長はメラークアメレオン(*Chamaeleo melleri*)やウスタレカメレオン(*Chamaeleo oustaleti*)のように全長80cmになるものがありますが、20～30cm位のものの方が多いようです。数センチにしかならない種類もいます。カメレオンは結構速く成長し、半年から1年で性成熟します。臭いは特にありませんが、糞などを溜め過ぎなければよいでしょう。鳴きません。

(3) 飼育上必要な施設と機材

ケージは市販されている爬虫類用ケージ、水槽、鳥かご等何でも構いませんが、通風はよい方がよいので、水槽ではない方がよいでしょう。木枠に金網を張るなど手製で作っても構いません。温室があるなら、そこへ放すのもよいでしょう。樹上性ですから高さが必要です。木の枝を入れてやりますが、カメレオンが掴めるようあまり太くない枝が適当です。葉についた水滴を舐めさせるため、植物をいれたり、ホンコンフラワーを入れたりします。床にも降りますが、ほとんど樹上で過ごしますから、枝や葉は豊富に入れ、これらは隠れ場所にもなります。温度は25℃位にし、赤外線電球で一部温度が高い所を作ってやります。カメレオンはいろいろな種類がありますから、要求する温度も様々です。赤外線電球の近くによく行っているようならば温度が低いと思われれます。逆にまるで近寄らないなら、もっと温度が低い方がよいかもしれません。日光浴は必要です。通風は必要で、通風が難しい場所であれば扇風機を使うのもよいでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は基本的に生きた昆虫類です。動かないと興味を示しません。コオロギ、ミルワーム、ジャイアントミルワーム、カイコ(幼虫)、ブドウムシ、ヤナギムシなど購入できるものを与え、バッタ、イナゴ、セミ、カマドウマ、ゴキブリ、チョウ、カマキリ、昆虫ではないが

クモなど採集できるものも利用します。カメレオンでやっかいなのは、突然食べなくなることです。餌を変えると食べるのがよくあるので、いろんな種類が必要となります。ピンクマウスも食べることがありますから、たまにはいいでしょう。餌は大きすぎたはいけないのはわかると思いますが、小さすぎる餌も疲れるのか、少しで食べるのをやめてしまいますから注意が必要です。カメレオンはあまり溜まり水を飲まず、葉についた水滴を舐めるので、給水は水滴を落とす装置を作ったり、霧吹きで朝夕2回以上、カメレオンのいる近くの葉に吹きかけてやります。カメレオンは動きは遅いのですが、結構動きまわります。力はあまりありませんが、ケージのフタが開いていれば逃げることがあります。カメレオンは神経質なので、不必要に持ったり、触ったりして、ストレスを与えない方がよいでしょう。他人に迷惑とか、危害を加えることはないと思われます。繁殖制限をするほどではありませんが、カメレオンは小さいうちはともかく、結構争うのでケージが狭ければ1個体で飼うようにし、交尾の時だけ同居という状態にします。繁殖制限するなら同居させなければよいでしょう。個体識別は大きさ、個体のもつ特徴でしますが、小鳥の足環を使うのもよいでしょう。

(5) 健康と安全の管理

カメレオンは健康状態のいいときは、色が明るく、動きにも張りがあります。体色がくすんでいたり、黒ずんでいるのは、温度が低いせいかもしれません。落ち着かないのは温度が高いとか、隠れ場所がないということが考えられます。歯ぐきにチーズの様な膿がついている場合はマウスロトという病気にかかっている証拠です。カメレオンはやっかいな動物ですから、よく観察してストレスを感じさせないように扱わなければなりません。病気に対して注射はよくないようで、飲み薬で対応したほうがよいでしょう。栄養がよいかどうかは、尾の付け根の背側を観察し、痩せて骨がごつごつしているかどうかで見ます。清潔に保つことは飼育の基本ですが、カメレオンにストレスを与えないようほどほどにしてください。

(6) その他特記事項

カメレオンは、ロゼッタヒメカメレオン (*Brookesia perarmata*) だけがサイテスの附属書Iに属し、他は全種附属書IIに属します。カメレオンは非常に魅力のある動物で、色々難しいことが山積しているのに、飼育に挑戦する人が後を絶ちません。しかし飼育が非常に難しい動物で、大半は飼い始めてすぐに原因不明で死んでしまうでしょう。まず餌が確保できるかどうかです。カメレオンはほとんど熱帯・亜熱帯に分布していますから、夏も冬も餌を与えて飼うことが必要です。少なくとも数種類の餌の目処がたたねば不可能です。生き物を飼うのです。面白そうだというだけで飼うことは絶対にやめてください。

16. アオジタトカゲ

(1) 分類、品種

アオジタトカゲ類はオーストラリアとニューギニアに分布しているトカゲ(スキנק)科のトカゲです。アオジタトカゲ属 (*Tiliqua*) は約10種が含まれますが、この中には以前は

別属とされていたマツカサトカゲや舌が桃色のモモジタトカゲなどが含まれていて、アオジタトカゲの名がついているのは5種です。この中で一番よく知られているのはオーストラリアの東部・北東部に分布しているヒガシアオジタトカゲ (*Tiliqua scincoides*) です。以下に述べるのは、断らない限りヒガシアオジタトカゲです。分類はまだ安定していないようで、オーストラリアの北部にいるキタアオジタトカゲもヒガシアオジタトカゲに含めることもあり、その時は2つの亜種に分けます。

(2) 形態、生理、習性

アオジタトカゲの名は、突然口を大きく開き、青い舌を出して威嚇することからきたと思われれます。もともとアオジタトカゲはそれほど気性が荒いトカゲではありませんから、馴れてくると口はあまり開かなくなります。寿命は10年位です。全長は大きくなると60cm位になりますが普通は30~40cm位です。1度に6~25頭の子を産みます。危険性はありません。時々口を開けて威嚇しますが、そんなことがあると気を付けていれば、たいしたことはないと思えます。口先を押し付けてきたとき、ちょっと咬むことがあります。たいして痛くありませんが、口を押し付けてきたら、すっと引くのもよいでしょう。たいした臭いはありませんし、鳴きません。

(3) 飼育上必要な施設と機材

ケージは飼う個体の大きさ、一緒に飼う個体数によりますが、長さ60cm位のものが基本かと思えます。水入れは、あまり水にはいる種類ではないので大きなものは必要ありません。床は乾いた状態に保ってください。飼育温度は25~30 にし、日光浴はさせた方がよいのですが、体温上昇は死につながりますから、日陰など体を冷やせるよう気を付けてください。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は昆虫、カタツムリ、花、果実などです。家庭で食べる野菜、果物類を色々与えてみてください。足も短く、動きも遅いので、逃げることをあまり注意しなくてもよいかもしれませんが、猫などがいたらいたずらされないよう気を付けてください。触ったり、抱いたりしたい時は、時々触って嫌がらないようにし、体の下に手を差し込んで持ち上げます。抱くときは四肢を自分の胸や腹に付けてやると落ち着きます。繁殖制限するほど増えるとは思えませんが、そうなったら雌雄を分ければよいでしょう。個体識別は大きさと外観の特徴でできます。

(5) 健康と安全の管理

脱皮の時、指先に皮が残ることがあります。時々ピンセットではがしてやります。取れにくいようでしたら、水でふやかして取ってやります。それでもだめなら食用油を少量たらしながら取ります。

17. オオトカゲ

(1) 分類、品種

オオトカゲはオオトカゲ科のトカゲで、30種以上がアジア、アフリカ、オーストラリアにいます。オオトカゲは独特の風格のある、魅力的なトカゲのグループです。

(2) 形態、生理、習性

オオトカゲといっても、3 mを超す種類から20cm位の小さな種まで大きさは様々です。3 mを超すのはコモドオオトカゲ (*Varanus komodoensis*) やハナブトオオトカゲ (*Varanus salvadori*) の2種だけです。舌は他のトカゲとちがいヘビと同じです。寿命はたいていの種類で10数年だろうと思われます。危険性があります。オオトカゲは馴れるものと馴れないものの差が極端です。咬まれれば危険性が大きな種類があり、歯も鋭いので気を付けてください。3 mを超すコモドオオトカゲやハナブトオオトカゲは、案外馴れ易い方にはいると思います。尾を振り回したり、口を開けて飛び掛ってくるものの方が、小さくても危険です。臭いは便などによるものです。大きいものでは臭いも出ますが、掃除をさぼらなければそれほどではありません。威嚇音は出しますが、声は出しません。

(3) 飼育上必要な施設と機材

ケージはある程度動きまわれる大きさにし、水槽でも構いませんが、しっかり付けられるフタが必要です。フタは重しをしておく方が安心です。水入れは体を丸めてオオトカゲがつかれる程度の大きさと深さが必要です。結構汚しますので、簡単に水洗いできるものが望ましく、排水は重要です。温度は25~30 にし、温度調節は重要です。日光浴は必要ですが、体温が上がり過ぎると死んでしまいます。日陰など体温を下げられる所を必ず用意してください。乾燥が好きな種類から、かなり湿度が高いのが好きなものまで様々です。湿度は高くてもムレない方がよいなど、条件が難しいものまであります。

(4) 飼い方のポイントと注意点

餌は大部分が肉食性ですが、果物を食べるものもいます。一般に与える餌は、大きなものではラットやマウス、ヒヨコ、馬肉、レバーなどです。小さな種類や小さい時は昆虫やピンクマウスを与えます。あまり太らせないほうがよいと思われます。餌を制限するのもよいが、ネズミ類のように栄養価が高いものを減らし、ヒヨコや馬肉やレバーなど様子を見ながら増やしてください。水入れの中で便をすることが多く、汚れていたら取り替えてください。逃走(脱走)防止には留意してください。慣らすのなら、触ってやるしかありません。上手に触れば、暴れないかもしれません。触る側が、嫌がらないよう触ると考えてください。迷惑防止や危害防止としては逃がさないことです。

オオトカゲはそう繁殖する動物ではありません。制限するほど増えて困るなら、雌雄を分けることです。個体識別は少数飼育なら、個体の特徴でできると思いますが、多数ならマイクロチップを注入するとよいでしょう。

(5) 健康と安全の管理

主な病気と予防については、風邪・肺炎、金網のケージによるトラブル、火傷等がありますので、グリーンイグアナの項を参照してください。オオトカゲは、傍目には仲良く過ごしているように見えるのですが、突然争うようになります。逃げきれぬほどの広さはケージで

は無理でしょう。争いが始まったら、すぐ分けた方がよいでしょう。雄同士が多いと思いますが、雌でも争います。体調にもよるのですが、大きい方がいじめるとは限らず、小さい雌が大きい雄をいじめることもあります。

観察は動物を飼育する場合の基本です。必ず記録を付けてください。栄養状態がよいかどうか、判断するのは難しいのですが、痩せすぎはわかると思います。太った状態の時、本当に体調がよいかどうか、はっきりいってわかりません。単純に少し太っているのなら構いません。ただ栄養が良過ぎるのはよくないでしょう。皮膚もケージも清潔に保ってください。

(6) その他特記事項

5種がサイテスの附属書Iに属し、残りの全種が附属書IIに属します。同居が難しい種類が多く、とくに雄同士は争いがちなので、原則的には分けて飼育すべきです。動物愛護管理法の政令で危険動物に指定されているのは、3mを超すコモドオオトカゲとハナブトオオトカゲの2種だけです。コモドオオトカゲはサイテスの附属書Iに属し、通常は手に入りませんし、飼うべきではありません。ハナブトオオトカゲはII表ですから飼うことはできます。しかし、許可が必要ですし、かなり大がかりな施設が要求されます。3mを超えるのは2種だけですが、それ以外にも大きくなる種類は多く、逃げ出したら人に不安を与えるでしょう。危険動物に指定されていませんが、できれば飼うのは小型の種類にかぎり、大型種は動物園などに任せるのが妥当だと思われます。

IV . 参考

< 引用及び参考資料 >

「クリーパー」隔月刊情報誌 / クリーパー社

「爬虫類・両生類800種図鑑」千石正一監修 / 1996 / ピーシーズ

「爬虫両生類飼育図鑑」千石正一著 / マリン企画

「爬虫両生類飼育入門」ロバート・デイヴィス、ヴァレリー・デイヴィス著 / 千石正一監訳 / 1998 / 緑書房

・ James R. CAREY and Debra S. JUDGE Longevity Records : Life Span of Mammals, Birds, Amphibians, Reptiles, and Fish Odense Univ. Press / 2000"

組織

「日本爬虫両棲類学会」

問い合わせ先 :

〒606・8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科動物学教室内

日本爬虫両棲類学会事務局 庶務 疋田 努

TEL : 075・753・4091 FAX : 075・753・4114

E - mail : tom@zoo.zool.kyoto - u.ac.jp

「爬虫両生類情報交換会」

問い合わせ先 :

〒171 0032 東京都豊島区雑司が谷1 24 12 松本方

爬虫両生類情報交換会

TEL : 03 3989 7358

E mail : JCD02261@nifty.ne.jp

ホームページ

「THE EMBL REPTILE DATABASE」 爬虫類、両棲類の分類を紹介している (英語版)

URL:<http://www.embl/heidelberg.de/~uetz/LivingReptiles.html>

ペット動物販売業者用説明マニュアル（爬虫類）

環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

〒100 8975 東京都千代田区霞ヶ関1 2 2

電話：03 3581 3351

請負者：社団法人 日本動物保護管理協会

〒107 0062 東京都港区南青山1 1 1 新青山ビル西館23階

電話03 3475 1695 FAX：03 3475 1697

発行：2005年3月

【マニュアル研究会委員（50音順）】

委員長 岡崎留美（東京都動物愛護相談センター指導監視係課長補佐）

石橋 徹（いのかしら公園動物病院 院長）

塩谷 亮（東京コミュニケーションアート専門学校、
福岡エココミュニケーション専門学校 講師）

原 幸治（元・東京都井の頭自然文化園 園長）

本マニュアルは、環境省の承諾を得て転載しているものです。 _